

2023年8月1日

みずほディーラーズアイ (2023年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 140.00 ~ 145.00

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

■ 先月の為替相場

【7月のドル/円は下落した】

6月末にかけてパウエルFRB議長から連続利上げを排除しないとの発言や、良好な米経済指標を受けてドル/円は145.07円まで上値を伸ばしたのち、144.41円で7月取引を開始、3日につけた144.91円が当月高値に。高値警戒感がある一方で、下では拾われる展開で、144円台で横ばい推移が続く。ただ、7日には東京時間から株安と共に円買い地合いとなり、その後北米時間で米民間雇用者数の伸びが弱いことが確認されるとドル売りに傾倒し、ドル/円は142円台まで下落した。

2週目に入ると、日銀の政策修正への警戒から円が買われると共に、米インフレ鈍化を期待したドル売りが重なり140円台まで下押す。12日に発表された米6月CPIが総合とコアの双方が事前予想を下回ると138円台前半まで続落する。13日に発表された米6月PPIも弱い結果となると137.25円の当月安値を示現。

3週目前半は138円台で推移したが、18日の植田日銀総裁のハト派な発言が時間と共に織り込まれる展開で、ドル/円は19日に140円台手前までじり高推移。週後半にかけては米金利上昇と日銀関係者がYCCの修正の必要性乏しいとみているとのリーク報道に142円手前まで急伸。

最終週はFOMCにてパウエルFRB議長の発言が想定よりタカ派ではないとの反応で一旦ドル売りになるも米第二四半期GDPが事前予想を上回るとドル買いとなり振らされる展開。週末の日銀会合では発表直後は上下に急変動する動きもあったが、結局ドル/円は上値攻めとなり、141.66円で31日東京時間取引を終えた。

■ 今月の見通し

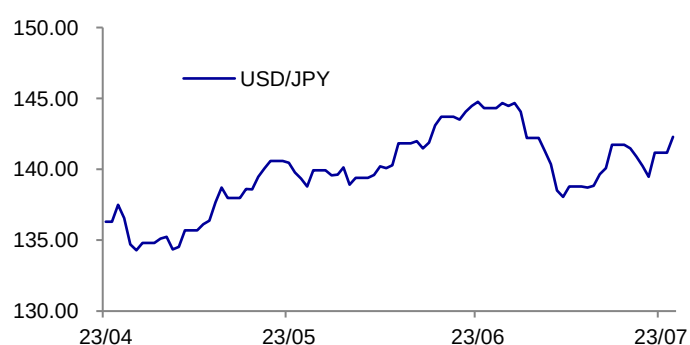
【8月のドル/円は底堅い展開を想定】

注目されていた日銀金融政策決定会合では柔軟化という旗の下、指値オペの水準が1.00%へと引き上げが決定された。発表直後は大きく円高に振れる場面もあったが、続いた植田総裁の会見では「正常化ではない」、「金融引き締めではない」という旨を繰り返し、建前上はファイティングポーズを崩さない姿にマーケットでは消化が進み、海外時間では141円台まで戻りを試した。加えて翌月曜日には、国債利回りの上昇を見てからか、臨時のオペが通知され、142円目前まで上昇、日本株も350円高となった。10年国債1.00%という指値オペの水準は黒田元日銀総裁が就任する前まで遡らないとないため、かけ離れた水準と言える。よって、実態的にはYCCが廃止されたにもかかわらず、株価と為替レートだけ見ると“なかったこと”という様相となっている。それどころか、日銀の次の一手はマイナス金利となることから、日銀は当面の間なにもできない、という安心感を指摘する声さえある。

YCC柔軟化による金利上昇圧力と、臨時オペによる抑止の中で実際10年金利がどこに落ち着くのかを見極める必要があるが、142円に乗せていくような場面では6月末～7月初にみられたように145円をトライしに行く展開も視野に入る。日米欧三極の政策イベントを通過したこと、海外は休暇シーズンに入ることからも基調は落ち着いた展開を想定している。ケアすべきリスクは米経済指標が上振れ、薄商いの中でドル/円が急伸、といったシナリオか。

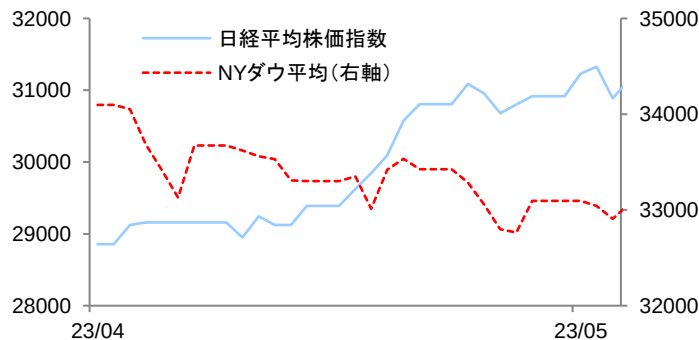
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	ISM製造業景況	6月	47.1	46.0	46.9
7/5	製造業受注	5月	0.8%	0.3%	0.3%
7/7	非農業部門雇用者数変化	6月	230K	209K	306K
7/7	失業率	6月	0.3%	0.4%	0.4%
7/12	CPI	6月	3.1%	3.0%	4.0%
7/17	小売売上高	6月	0.5%	0.2%	0.5%
7/26	政策金利	-	5.25-5.50%	5.25-5.50%	5.00-5.25%
7/27	GDP	2Q	1.2%	1.6%	4.2%
7/28	日銀金融政策決定会合	-	長短金利操作運用の柔軟化		

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	13名	145.00 ～ 138.00	ベア	5名	144.00 ～ 135.90
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	143.50 ～ 135.50	米国のインフレ指標の一服や景況感の軟化がドル売りを喚起。ドル円についても、円ショートポジション解消が当面継続する公算大。加えて、USDCNHの上値の重さもドル円の下値を探る展開をサポートしよう。	山口	ブル	145.00 ～ 137.00	日銀はYCCの柔軟化を発表したものの、日米金利差が大きく縮むとは考えにくく、ドル円は底堅く推移すると予想。一方で、欧米中銀が追加利上げに慎重なスタンスを強めるとドル円の上限も限定的と予想する。
河合	ブル	145.00 ～ 138.00	日銀金融政策決定会合での「YCC運用柔軟化」発表直後、ドル円は138円近辺まで下落する場面も見られたが、反転上昇。YCCは実質撤廃された恰好だが、日銀のゼロ金利解除への道のりは遠く、ドル円は底堅い展開を予想。	松永	ブル	144.00 ～ 139.00	日銀によるYCC政策柔軟化はサプライズとなったが、インフレ抑制のために高水準の政策金利を維持する米国と、緩和政策を維持する日本の構図は変わらず。強い米国経済への期待もありドル円は底堅い動きが継続しよう。
川端	ブル	144.00 ～ 138.00	円金利の上昇容認によりYCCは実質的に撤廃されたとみるが、足元の金利水準からは距離があることから投機的な円買いの機運が削がれた格好。米株高の恩恵を受けた円キャリーを背景にレンジ内でじり高の展開を見込む。	田川	ブル	145.00 ～ 140.00	政策イベント終了、夏枯れ相場入り。10年金利の落ち着く先を見極めながら、リスクは上方向か。
加藤	ベア	144.00 ～ 134.00	所詮日米金利差に上乗せされた糊代部分についての調整であり、本格的に米国の金融政策転換を織り込んで来ているわけではない。しかし、そうであってもその調整幅が小さすぎると感じる	上遠野	ベア	144.00 ～ 135.90	日銀のYCC柔軟化を受け、日銀の許容範囲を探るような本邦長期金利の上昇圧力を背景に、ドル円は上値の重い展開を想定。欧米中銀の追加利上げに慎重なスタンスも、ドル円の重しとなりやすいか。
山崎	ブル	145.50 ～ 138.80	ドル円は堅調な展開を予想する。7月28日のBOJでYCCについて一部修正を加えたものの、引続き海外の経済指標が堅調であることから、一旦は上昇トレンドが継続すると予想したい。	小林	ブル	145.00 ～ 137.50	7月開催の日銀では、指値オペ利回りを0.5%から1.0%へ引き上げを実施したものの、結果的にマーケットとしては円売りで反応。米経済指標の強い結果が確認されれば、追加利上げ観測再燃により、一段の上値トライとなるか。
伊藤	ベア	144.00 ～ 138.00	日銀は事実上YCC撤廃を宣言したが、足元の円売り地合いに変化なし。ただし、米金利の上昇余地は限定的でドル円の上値は重いだろう。米金利が低下する局面では再度140円割れを試すとみるが、絶対的な日米金利差を背景に下値も堅い。	逸見	ブル	145.00 ～ 138.00	日銀のYCC修正余波を受け、円が強含む場面も想定されるが、マイナス金利解除について見通しが立たない中、根強い円売りは継続。米金利の高止まりも踏まえれば、結局、ドル円は底堅い推移を予想。
山岸	ベア	145.00 ～ 137.00	日銀のYCC柔軟化で円金利に上昇余地が生まれ、ドル円も円高圧力がかかりやすくなりそうだ。加えて米インフレの鈍化などからFBRが次回会合での利上げを強く示さず、打ち止め観測が広がっていることもドル売り材料になると予想。	鈴木	ブル	145.00 ～ 138.00	日銀の政策修正を受けた円金利の上昇圧力には警戒しつつも、高止まりするインフレや金利引き上げ局面でも景気後退の予兆が見られない米経済の力強さは健在。引き続き底堅い推移を予想する。
尾身	ブル	145.00 ～ 139.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、先月末に日銀がYCC運用を柔軟化しているため、円買いが強まる局面も見られるか。	大熊	ブル	144.00 ～ 137.00	日銀はYCCの柔軟化を決定したが植田総裁が緩和継続を強調していることから利上げには程遠く日米金利差が意識される状況は不変。米国のインフレは鈍化した一方で景気は未だ底堅いこともあり、一方的な円買いには進みづらいと予想。
上野	ブル	143.00 ～ 138.00	主要中銀のイベントを7月後半に消化。夏枯れ相場の様相が強まる中で大きな値動きは期待しにくいと予想。しいて言えば、米指標については総じて悪くない印象の中で、円安方向への推移に傾きやすいか。	西	ブル	145.00 ～ 138.00	日銀金融政策決定会合でのYCC修正による円高は一時的。あくまで緩和継続の中、日米金利差を背景にじり高か。米経済指標が強含めば、追加利上げの織込みも進み、ドル円上昇のサポートとなるだろう。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0700 ~ 1.1200
EUR/JPY 148.00 ~ 158.00

金融市場部 為替営業第一チーム 西 拓也

■ 先月の為替相場

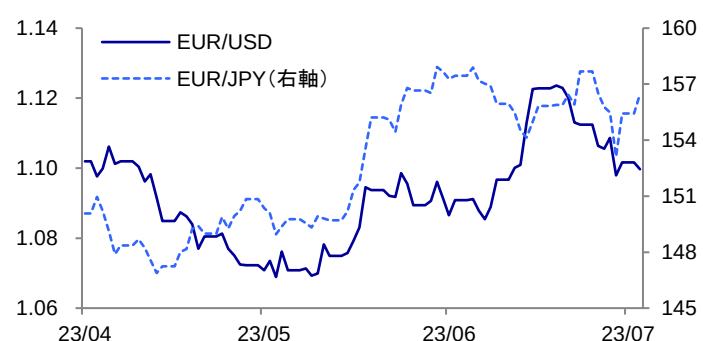
7月のユーロドル相場は1.09台前半でスタートし、中旬に1.12台まで上昇後、1.10近辺まで戻した。3日、ユーロ圏6月製造業PMI(確報)の弱い結果を受け1.08台半ばに下落も、軟調な米経済指標を受けたドル売りを背景にほぼ往って来い。5日、仏5月鉱工業生産の強い結果を受けて1.09台に乗せるも、ユーロ圏6月非製造業PMI(確報)の軟調な結果を受けて1.08台半ばへ反落。6日、米金利上昇により一時1.0834まで下落するが、独5月製造業受注の良好な結果を受けて1.09台へ。NY時間、米金利上昇を受け再度下落も、1.0834をバックに反発。7日、米6月非農業部門雇用者数変化が予想を下回り米金利が急低下すると1.09台後半まで急伸し越過。第二週、10日はナゲル・独連銀総裁のタカ派発言を背景に1.10台へ上昇。11日、独7月ZEW景気期待指数の軟調な結果で1.09台後半へ下落する場面もあった。12日、米6月消費者物価指数の軟化を背景に1.11台へ。13日、ECB政策理事会議事要旨(6月会合分)のタカ派な内容や米6月生産者物価指数の軟調な結果を受け、1.12台へ続伸。14日、米経済指標の良好な結果に上値を押さえられ、1.12台前半で揉み合った。第三週、17日は欧州株安やナゲル・独連銀総裁のタカ派発言が材料視される中、1.12台前半でレンジ推移。18日、米金利低下の流れに一時1.1276(今月高値)に上昇も、クノット・オランダ中銀総裁のハト派発言や米金利反転を受け1.12台前半に反落。19日、英6月消費者物価指数の鈍化を受けた欧州通貨安や米金利上昇を背景に1.11台へ。20日、堅調な米労働統計を受けて1.11台前半に下落。21日も軟調な推移が継続し越過した。第四週、24日はユーロ圏7月製造業/非製造業PMI(速報)の弱い結果を受けて1.10台後半へ下落。25日、独7月IFO企業景況感指数やユーロ圏4〜6月期銀行貸出調査の軟調な結果が材料視され、1.10台前半に続落した。26日、パウエルFRB議長会見後にドル売り優勢となり、一時1.11台を回復。27日、独金利上昇の流れに一時1.1149に上昇。ECB政策理事会は事前予想通り+25bpの利上げを決定も、ラガルドECB総裁は「次回追加利上げはデータ次第」と慎重な姿勢を示したことから市場はユーロ売りで反応し、1.0966に急落した。28日、1.1047まで下げ幅を拡大するも、堅調な欧州株式市場や軟調な米経済指標を背景に1.10台に乗せた。月末31日も1.10台前半で推移。

■ 今月の見通し

今月のユーロドル相場は、上値の重い展開を予想する。7月27日のECB政策理事会では市場予想通り25bpの利上げが決定され、預金ファシリティ金利については3.50%から3.75%へ引き上げられ過去最高水準に達した。ラガルドECB総裁は「次回会合以降の利上げはデータ次第」と従前の積極的な金融引き締め姿勢から慎重姿勢に転じており、ECBの利上げサイクルが終了に近づいていることを示唆するものであった。依然としてユーロ圏は雇用・賃金情勢の逼迫を背景にインフレ率5%台と高止まりしているものの、足許のGDPや域内PMI、独IFOをはじめとする景況感指数などは景気後退を意識させ、実体経済の悪化が鮮明になりつつある。スタグフレーションも懸念されることから、ECBとしても物価抑制ではなく景気下支えに重きを置く蓋然性が高まっている。対する米国では、7月26日のFOMCにおいて25bpの利上げが決定されたと同時に次回以降の利上げについて「データ次第で判断」との姿勢が示された。ECB・FED共に同様のスタンスであるが、ユーロ圏の経済指標が概ね軟調な結果が続いている一方、堅調な雇用環境が続く米国にて更に強いデータが示されれば年内追加利上げの織込みが進む中でドル買い優勢となり、ユーロドル相場の重石となろう。IMM通貨先物取引における投機筋のユーロロングポジションも依然として大きいことを踏まえれば、ポジション解消の動きによるユーロ売りの加速には警戒が必要である。他方、8月24-26日に開催されるジャクソンホール会議も年内金融政策を展望する上で重要な手がかりとなる。ECBがインフレスパイラルへの警戒感から当初のタカ派スタンスに回帰する場合にはユーロ買い材料となるため留意すべきか。

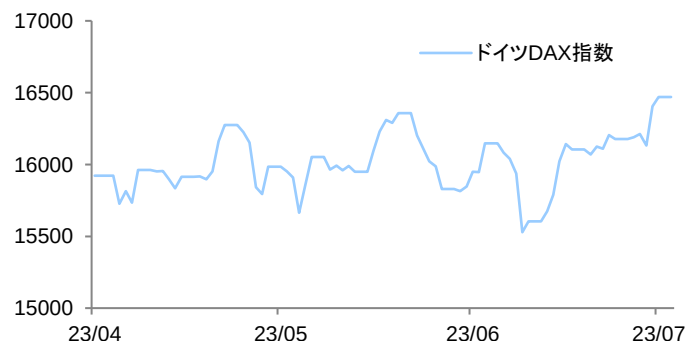
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	ユーロ圏製造業PMI	6月	43.6	43.4	44.8
7/5	ユーロ圏コンポジットPMI	6月	50.3	49.9	52.8
7/5	ユーロ圏サービス業PMI	6月	52.4	52.0	55.1
7/5	ユーロ圏PPI(前年比)	5月	-1.3%	-1.5%	1.0%
7/11	独CPI(前年比)	6月	6.4%	6.4%	6.4%
7/11	独ZEW景気期待指数	7月	-10.6	-14.7	-8.5
7/25	独IFO企業景況感指数	7月	88.0	87.3	88.5
7/27	ECB主要政策金利		4.25%	4.25%	4.00%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	7名	1.1300 ～ 1.0850	ベア	11名	1.1200 ～ 1.0700
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ブル	1.1300 ～ 1.0850	米国の景況感軟化がドル売りをサポート。ミラーとしてユーロの底堅い展開を予想。一方、欧州ファンダメンタルズのスタグフレーション懸念も孕んでおり、ユーロが一方方向に買い進まれる地合も考えづらい。
河合	ベア	1.1150 ～ 1.0700	7月ECB理事会後に発表された声明文は、今までのタカ派スタンスから、ECBの利上げ終焉を想起させるハトな内容に変更された。加えてユーロ圏景況感の悪化から、ユーロドルは軟調な展開を予想。
川端	ベア	1.1200 ～ 1.0800	インフレ指標の鎮静化を受けてECBは引き締めスタンスから様子見モードに転じており7月高値を上限とするレンジ相場入りがメインシナリオ。引き続き米金利に従属的な展開を想定するが米国もインフレ懸念が後退しており方向感はない。
加藤	ブル	1.1350 ～ 1.0800	米国が先に利上げ停止になることは自明。ECBとのスタンスの相違が目立ってくることになる。もちろんヨーロッパも米国を追いかわけることになるであろうが、追い抜くことにはならないと思う。
山崎	ブル	1.1200 ～ 1.0850	米国でのインフレがうまくコントロールされている指標も出ており、米経済にとってはプラス材料一方で、リスクオンの環境下でユーロドルは動きづらいと考えるが、方向感としてはやや上方向を予想する。
伊藤	ベア	1.1200 ～ 1.0700	ECB理事会ではタカ派一辺倒の姿勢からハト派に転換。インフレ圧力低下は朗報だが、スタグフレーション懸念からEURは上値重い相場が続くだろう。特にリスクオフ局面では、積みあがったEURロングのポジション調整に警戒要。
山岸	ベア	1.1250 ～ 1.0700	これまでタカ派一辺倒だったラガルド総裁が、7月ECBで次回利上げはデータ次第で据え置きもあり得ると発言。ユーロ圏の景況感悪化で利上げスタンス継続が難しくなっていることもあり、ユーロは調整局面を迎えると予想。
尾身	ブル	1.1300 ～ 1.0800	ECBの利上げ継続により底堅い推移が継続すると考えている。但し、米国も高い政策金利を維持しているため、もみ合いが継続し値幅は限定的か。
上野	ブル	1.1200 ～ 1.0750	ECBの利上げ織り込みは米国対比で進んでいる一方、冴えない経済指標が相次いでいる状況。金融政策の調整観測からユーロ/ドルは調整局面が続くのでは。
山口	ベア	1.1200 ～ 1.0800	ECBは今後の利上げについて米国同様「データ次第」との姿勢を示した。インフレは高止まりをしているものの、経済指標が軟調なものが続いているため、追加利上げへの期待感が高まりにくいと予想。
松永	ベア	1.1200 ～ 1.0850	ECBは引き続きインフレ抑制姿勢を示すが、欧州の景況感の悪化など景気後退への警戒が強まる中、ECBの利上げ継続がそのままユーロ高には繋がるまい。ユーロは上値が重い地合いが継続しよう。
田川	ベア	1.1200 ～ 1.0800	ラガルド総裁の発言を受け、従前よりもユーロに対する強気バイアスは少なからず影響を受けられると思われる。ユーロが売り込まれるとまでは言わないが、ユーロ買いポジションが調整されることによってユーロ/ドルは上値の重い展開となろう。
上遠野	ブル	1.1200 ～ 1.0900	直近のECBでは追加利上げについてはデータ次第との姿勢を示しており、ユーロ圏内のコアインフレの粘着性が想定される状況下、FRBとの対比感の中でユーロが強含み易いか。
小林	ベア	1.1300 ～ 1.0850	欧州圏の軟調な経済指標の結果が続いており、回復の兆しが見られず。一方で、米国においては、経済指標の強い結果が確認できれば、追加利上げ観測再燃により、対ドルでユーロが売られる展開となるか。
逸見	ベア	1.1200 ～ 1.0700	欧州圏は経済減速懸念が意識される中、ECBの利上げスタンスが軟化。米国対比タカ派という前提に立ったユーロ買いシナリオは揺らいでおり、ユーロ売り地合いを予想。
鈴木	ブル	1.1400 ～ 1.0950	高止まりするインフレや引き締め継続の持続性の観点から、米国と比較してもユーロは買いやすい状況。欧州各国の経済指標の結果等から、景気後退懸念が依然として強いものの、堅調な推移を予想する。
大熊	ベア	1.1200 ～ 1.0700	8月は金融政策の発表が予定されていない為、主要な経済指標に一喜一憂する相場となりそうだが、足元、欧州の指標は弱いものが目立つ。欧州経済の先行き不透明感が増している状況下、ユーロは軟調な地合いを予想する。
西	ベア	1.1200 ～ 1.0700	7月FOMC・ECBでは、次回以降の追加利上げについては双方とも「データ次第」とのスタンス。景気後退をやはり予測していないFEDとスタグフレーションが懸念されるECBではFEDに軍配か。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.3000
GBP/JPY 178.00 ~ 185.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

7月の英ポンド相場は月初は対ドル1.27からスタートし、中旬には1.30を大きく上回りポンド高が進んだ。しかし、7月19日に発表された英6月消費者物価指数(CPI)が市場予想を大きく下回る結果となったことを受けてBOEに対する利上げ期待は後退し、ポンドも1.30を割り込み、上値を抑制される格好となった。

1週目は対ドルで月曜日から木曜日にかけてじりじりと値を切り上げた後、7日に発表された6月分の米非農業部門雇用者数が市場予想を下回ったことを受け、対ドルで大きく上昇、6月16日につけた1.2848の年初来高値を更新。

2週目もポンドは対ドルで+2%近く上昇し、2週連続の増価。12日には2022年4月以来となる対ドル1.30を超えて上昇した。12日に公表された米6月CPIが市場予想を下回ったことを受けて、幅広い通貨に対しドルが売られた。

3週目はポンド相場は対ドルで約▲1.8%と大きく反落。とりわけ、19日に公表された英6月CPIが市場予想を大きく下回ったことを受け、節目の1.30を割り込んでからの下落が大きくなった。英6月CPIは前年同月比+7.9%と、5月の同+8.7%から大幅に減速、市場予想の同+8.2%を下回り、1年3か月ぶりにインフレ率は同+8%を下回った。コアCPIの上昇率も前年同月比+6.9%と5月の同+7.1%から鈍化し、市場予想の同+7.1%を下回った。CPIの発表を受け、直後に英2年債利回り▲20bp低下、2023年3月以来の大幅下落となった。また、市場が織り込むBOEのターミナルレートもCPI発表後に6.0%を割り込んだ。

4週目のポンド相場は日米欧の中銀イベントをこなしながら一進一退の展開となった。26日のFOMCは2会合ぶりの+25bpの追加利上げを決定した一方で、パウエルFRB議長が記者会見で経済データ次第では次回9月会合で利上げを見送る可能性を示唆したこともあり為替市場はドル安で反応し、ポンドの対ドル相場は1.30近辺まで上昇。しかし、27日のECB会合では9会合連続となる+25bpの利上げが決定される一方で、ラガルドECB総裁は記者会見で9月以降の金融政策方針について利上げも据え置きもあり得ると指摘したことを受けECBの引き締め長期化懸念も後退し、ユーロ売りと共にドルが買い戻され、ポンドの対ドル相場も再び1.28を割れる水準まで下落した。その後は28日に公表された2023年4～6月期のユーロ圏主要国の実質GDP成長率(速報値)が市場予想を大きく上回ったこともあり欧州通貨が買い戻され、ポンドの対ドル相場も4週目の週初の水準となる1.285まで戻している。

■ 今月の見通し

今月の英ポンド相場は対ドル・対円で底堅い展開を見込む。FRB、ECBの利上げ停止の可能性が市場で意識されるなか、ポンドはBOEの引き締め長期化観測によってサポートされるだろう。

8月3日に控えるBOEの金融政策決定会合では、+25bpの追加利上げが発表されるだろう。6月会合では+50bpに利上げ幅を拡大したものの、その後発表された英6月CPIが前年同月比+7.9%と、5月の同+8.7%から大幅に減速、市場予想の同+8.2%を下回り、過去1年3か月ぶりにインフレ率は同+8%を下回ったことを受け、利上げ幅を従来のペースに戻すと見られる。もっとも、FRBやECBと同様に、次回会合(BOEは9月21日)での利上げ停止の可能性を示唆するところまではBOEは踏み込まない可能性が高い。英CPIの伸び率は低下しつつあるとはいえ、米国やユーロ圏よりも依然として高く、インフレ対応の遅れに対してBOEは英議会や世論から厳しく非難されている。BOEは28日、FRBのバーナンキ議長が主導して経済予測の見直しを始めると発表した。BOEが高インフレを予測できず、金融引き締めが不十分だったとの批判に対応する。今夏にも見直しを開始し、2024年春に調査結果を発表する予定。BOEが外部の人材に金融政策の分析・運営を頼ることは珍しいことではないが、バーナンキ氏の起用は、BOEがインフレ抑制に向けた信認の回復にそれだけ苦慮していることの現れであろう。

対円では、7月28日に日本銀行が決定したイールドカーブ・コントロール(YCC)の修正によって、どれだけドル/円に対する上昇圧力が和らぐかにポンド/円の動向も依存しよう。ドル/円の動向の見方に関しては『中期為替相場見通し』などを参照されたいが、日銀の声明文にもあるように今回の決定自体は緩和政策の継続を意図したものであり、円安是正効果は限定的なように感じられる。日本と英国の金利差は多少縮小する可能性はあるにせよ、金利差の絶対水準は開いたままである。実際の市場の動きを見ても、7月28日の日銀によるYCCの修正の前後の円高・ドル安の進行によってポンド/円相場も一時、181円台から176円台半ばまで下落したが、結局は日銀の緩和と継続の方針に変わりはないという見方が広まるにつれドル/円は反発、ポンド/円も181円台半ばと週初と変わらない水準に落ち着いている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

今月のつぶやきのお題としていただいたものの、、、英国在住の人に聞いてはいけない質問でしょう。英国の食事のまずさは、しばしば笑いのネタにされます。かく言う私も、ロンドンでやたら歯ごたえのあるステーキ、ばさばさの米に脂が乗っていない魚の切り身が置かれた寿司(のようなもの)、に遭遇しました。しかも値段は日本よりはるかに高いので、誰も「英国での食事に期待はできない」という結論に至るのに時間はかからないと思います。

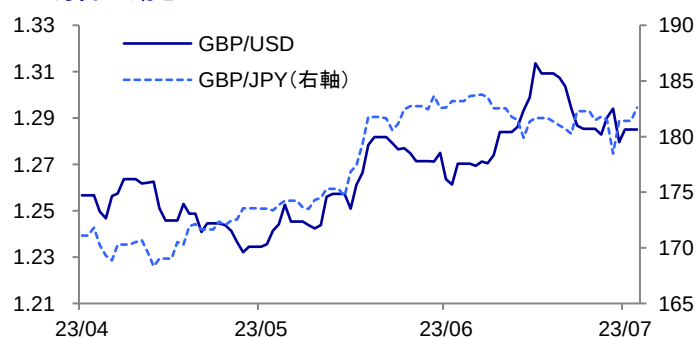
とはいえ、ロンドンでの勤務が長い方に聞くと、ここ数年でだいぶ食事のレベルが改善したようです。やはり世界中から移民を引き寄せている街で、彼らが開いている飲食店は多く、熾烈な生き残り競争の中で味に磨きがかかっているようです。インド系の人々が多いのでカレーは美味しいですし、こちらのオフィスではベトナム系の料理店がランチのテイクアウトで人気です。

「当地のお勧めフード」というお題からずれてしまいました。英国ならではの食事ということであればフィッシュアンドチップスをお勧めします。それも格式ばったレストランでなく、パブでビールをひっかけつつサッカーのプレミアリーグの放送を見ながらいただくのが最高です。また、私の家族はスコーンにはまっています。M&S(高級路線のスーパー)では店内にベーカリーがあり、そこで売っている焼き立てのスコーンにクロテッドクリームとジャムを塗って、紅茶とともにいただければ、リーズナブルに優雅な気持ちを楽しめます。

結論として、英国の食事は高くてもまずい、という定説を否定できるものではないですが、それなりに食事を楽しむこともできるのではないかと感じています。

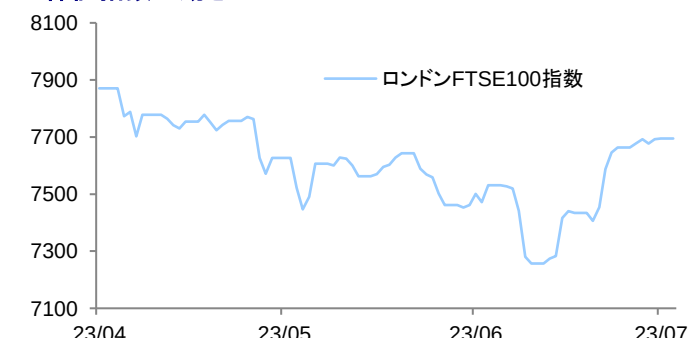
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/11	週平均賃金(前年同期比)	3-5月	6.8%	6.9%	6.7%
7/11	失業率	5月	3.8%	4.0%	3.8%
7/13	RICS住宅価格指数	6月	-35%	-46%	-30%
7/13	鉱工業生産(前月比)	5月	-0.4%	-0.6%	-0.2%
7/13	製造業生産(前月比)	5月	-0.5%	-0.2%	-0.1%
7/19	CPI(前年比)	6月	8.2%	7.9%	8.7%
7/21	小売売上高(前月比)	6月	0.2%	0.7%	0.1%
7/24	製造業PMI	7月	46.0	45.0	46.5
7/24	サービス業PMI	7月	53.0	51.5	53.7
7/31	不動産承認件数	6月	49.0k	54.7k	50.5k

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6500 ~ 0.6900
AUD/JPY 91.00 ~ 97.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

7月の豪ドルは初旬は0.6650を中心に振幅し、中旬には0.6895の月間高値を付け、月末にかけて0.66半ばへ戻した。月初、RBA会合では大方の市場予想通り政策金利を4.10%で据え置きとしたが、声明文で「インフレを目標に戻す為必要な対応を取る」と追加金融引き締めが示唆されたことで0.67近辺で推移した。しかし、中国6月サービス業PMI等の中国指標が予想比下振れとなると豪ドルの重しとなり0.66台半ばまで下落。FOMC6月議事要旨で一部のメンバーが追加利上げを支持していたことが明らかになった事でも、ドル買いの流れから0.66半ばで推移した。その後、米6月ADP雇用統計では予想比を上振れたため、一時0.66を割ったが、反対に米6月雇用統計では非農業部門雇用者数が市場予想を下回る結果となりドルが大きく売られる動きに豪ドルは0.67まで急伸した。中国政府が不動産セクターのてこ入れを図る為、資金繰りが悪化している不動産開発業者に融資返済の1年延長など支援策を拡大した事も豪ドルをサポート。中旬は米6月CPIが前年比で急激に鈍化し、ドル売りを背景に0.6690近辺から一時0.6796まで上昇した。豪州ではRBA次期総裁に現在副総裁を務めるブロック氏が任命され、ロウRBA総裁よりハト派である事が意識されると豪ドル安へ推移した。米7月ミシガン大学消費者マインドや1年先期待インフレ率が堅調な内容となった事でもドル買いが強まり0.68台前半まで軟化した。加えて中国4～6月期GDPや小売売上高、不動産投資等が予想比下振れとなると中国景気減速が意識され、更に下落。イエレン米財務長官が「米景気後退は想定せず、労働市場は力強い」と述べた事でもドル買いが強まり、0.68割れとなる場面もあった。下旬にかけては予想を上回る豪6月雇用統計結果を受けて0.68半ばまで急伸。但し、米新規失業保険申請件数が労働市場の底堅さを示したことで年内の米国追加利上げ観測から米国債利回りが上昇し、豪ドルは再び0.67台へ沈んだ。この他豪4～6月期CPIが予想を下振れた事から重く推移。注目されたFOMCでは予想通り+25bpの利上げが決定されるも、特段新しい材料がでてこなかった為ドル売りの反応で豪ドルはサポートされた。その後人民元中心レートが元高に設定されたことで人民元高が進み、豪ドルも一時0.6821まで上昇。但し米4～6月期GDP、米6月耐久財受注が予想を上振れ、ドル買いからを背景に一気に0.6720近辺まで下落した。米利上げ停止への期待感が後退した事を背景に株価が下落幅を拡大する中、豪ドルは0.6710近辺まで下落。その後「日銀がYCC修正案を議論」との報道が伝わると円買いが強まり、クロス円売りに引きずられ豪ドルは0.66台前半まで下落した。

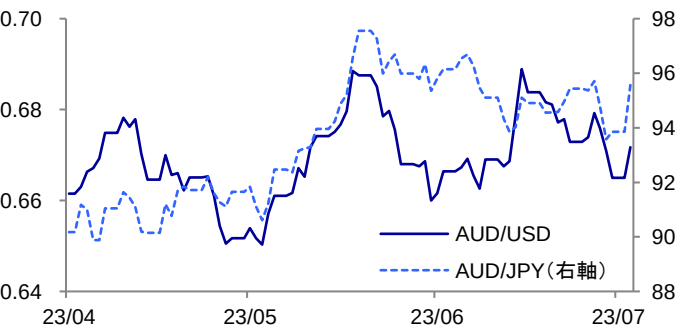
■ 今月の見通し

今月の豪ドルは米豪両国国内でのインフレ減速を背景にピーク金利を探りながらの推移となろう。7月28日に発表された豪4～6月期CPI(前年比)では前回値7.0%から6.0%まで大きく下落。豪4～6月期CPIトリム平均(前年比)でも前回値、予想を共に下振れ6.0%を割り込んだ。これを背景に年末までの金利織り込みは1回も織り込まれなくなり、ピーク金利が現在の4.1%となるという見方も出てきた。インフレ押し上げ要因となる豪労働環境に関しては直近豪6月雇用統計では失業率の前回値が3.6%から3.5%へ修正され、6月も3.5%となり、引き続き逼迫した豪労働環境を示唆している。また、賃金は7月1日から豪労使裁定機関フェアワーク委員会(FWC)が最低賃金が8.6%引き上げられた他、逼迫する雇用市場で多くの豪企業が人材流失を阻止する為、防衛策としての昇給に迫られている。加えて労働協約にインフレ連動の賃上げ保証のある複数企業で賃上げが実施された。これらの影響が数字として現れる今月発表の統計結果でインフレ上昇への寄与度を再評価したい。結果的にインフレ上昇が再燃していればRBAによる追加利上げの可能性が高まる為、豪ドルは下値を支えられよう。この他、中国政府による不動産業界低迷に対する追加のてこ入れ策も待ち遠しく、具体的な政策の発表があれば人民元上昇を背景に豪ドルが追随して上昇することが予想される。

一方米国では足元で米4～6月期GDP(速報値)の強さが顕示され、FOMCによる利上げ打ち止め期待が後退した。但し先物からの米利上げ織り込みを見てみると現状の5.25～5.50%がピーク金利とみられている模様で、年末にかけては追加利上げは1回も織り込まれていない。むしろ2024年5月までに1回の利下げを織り込んできている状況である。8月4日に発表予定の米7月雇用統計では失業率は3.6%で維持されるものの、米7月非農業部門雇用者数は前回を下回る伸びが予想されており、米7月平均時給に関しても前回から若干鈍化すると見込まれている。そうなればドル売りの流れから豪ドルは支えられるという見方だが、足下では日銀YCC修正を受けて、ややドル売り円買いになりやすい地合いという事もあり、クロス円である豪ドル円売りに引きずられ豪ドルが一時弱含む可能性にも警戒感が必要とみられる。

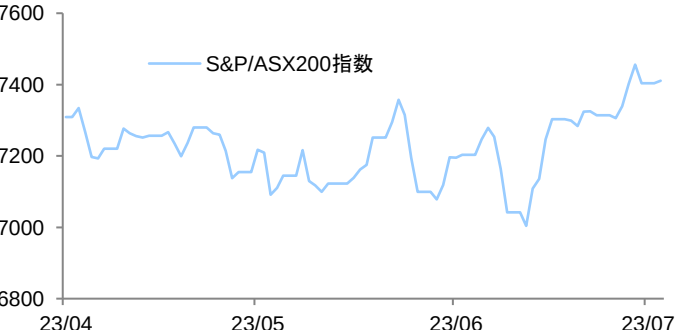
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	RBAキャッシュレート	7/14	4.10%	4.10%	4.10%
7/6	貿易収支	5月	A\$10900m	A\$11791m	A\$10454m
7/11	ウエストバンク消費者信頼感	6月	-	2.70%	0.2%
7/20	雇用者数変化	6月	15k	32.6k	76.5k
7/20	失業率	6月	3.6%	3.5%	3.5%
7/26	CPIインディケーター	6月	5.4%	5.4%	5.5%
7/26	CPI(前年比)	2Q	6.2%	6.0%	7.0%
7/26	CPIトリム平均値(前年比)	2Q	6.0%	5.9%	6.6%
7/28	PPI 前年比	2Q	-	3.9%	5.2%
7/28	小売売上高(前月比)	6月	0.0%	-0.8%	0.8%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3000 ~ 1.3500
CAD/JPY 103.30 ~ 109.30

米州資金部カナダ室 ミタリ・チャクラデオ
岩田 保子

■ 先月の為替相場

7月初めにサウジアラビアとロシアは自主減産を公表し、WTI先物価格の上昇によりCADが買われ、USD/CADは1.32台半ばから1.32台前半まで下落した。しかし、7/4に中国と欧州の6月PMIが前月比低下したことから、景気後退が懸念され、USD買い優勢となった。翌日、米6月ADP民間雇用者数が大幅に増加したほか、カナダ5月貿易収支の赤字額が増大した。その結果を受け、米長期金利が上昇し、USD/CADも1.3387まで上昇した。7/7に発表されたカナダ6月雇用者数は前月比大幅に増加したものの、賃金上昇率は低下し、労働市場での需給の緩みが見られた。米国では、6月の平均賃金は前月から上昇したものの、非農業部門雇用者数が前月比で減少した。この発表以後、前日まで買われたUSD が売られ、USD/CADは1.32台半まで下落した。

7/12に発表された米6月CPIは総合、コアともに予想を下回り、米長期金利の低下に伴い、USD/CADは1.31台半ばまで下落した。続いて、カナダ中銀が予想通り0.25%の利上げを決定し、政策金利を5.00%へと引き上げ、USD売り・CAD買いが継続。一時1.3093をつけるに至った。しかし、7/14に発表されたミシガン大学消費者センチメントの7月速報値が予想を大幅に上回り、期待インフレ率も前月から上昇したことから、USDが1.32台前半まで買い戻された。カナダ6月CPIは総合で伸びが鈍化したものの、コアは前月から上昇。さらに7/19に発表されたオーストラリアの6月雇用統計が予想を大幅に上回り、AUD買い・USD売り優勢の中、USD/CADも再び1.31台へと下落した。

7月下旬には、21日に発表されたカナダ5月小売売上高が総合で前月比伸びが鈍化し、コアは横ばいとなった。その結果を受け、USD/CADはCAD売り優勢となり、1.32台を回復。しかしその後は、7/26のFOMC結果発表を控え、USD/CADは1.315~1.3230の狭いレンジで推移した。

7/26には、FEDが予測通り0.25%の利上げを決定し、政策金利を5.50%（上限）へと引き上げた。発表後はUSDが売られ、USD/CADは一時1.32を下回ったが、1.32台前半まで買い戻された。

■ 今月の見通し

7/12にカナダ中銀が0.25%の利上げを決定し、政策金利を5.00%へと引き上げた。カナダ中銀の声明文によると、エネルギー価格の下落により、世界的にインフレ圧力は緩和しつつある一方、カナダ国内では労働需給の逼迫が続いており、需要過剰によりサービス業ではインフレ圧力が継続。同時に発表されたカナダ中銀の経済見通しによると、2023年のカナダのGDP成長率を1.8%（4月時予測+1.4%）へと上方修正し、インフレ目標（2%）の到達時期を2025年半ばとし、従来の想定よりも2四半期遅らせた。今後の金利見通しについては、「データ次第」との姿勢を維持し、9月以降の追加利上げへ可能性も残した。7/27現在、9/6会合での市場における利上げ確率は約38%となっており、年末までにはあと1回、政策金利が5.25%まで引き上げられる可能性が織り込まれている。

一方米国では、7/26のFOMC後、パウエルFRB議長は、ターミナルレートが間近に迫っていることを示唆するとともに、追加利上げの有無は「データ次第」で、利上げか据え置きかは会合毎に判断していくとのスタンスを維持したが、市場での9/20会合での利上げは7/27現在、織り込まれていない状態である。

カナダ中銀、FEDともに、今後の金融政策もデータ次第としているだけに、8月もインフレ率、インフレ期待、雇用統計等の主要経済指標が注目される。レンジとしては1.30~1.35を予想。米国の雇用統計が強く、またインフレ率が再び上昇するような場合、USD/CADは最近のレジスタンスである1.3370を上抜けする可能性も考えうる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』
カナダは、さまざまな文化の影響を受けた豊かな食文化を持つ多様性に富んだ国。味覚を刺激するおいしい食べ物の数々をお勧めします。

①プーティン:ケベック発祥の伝統的なカナダ料理であるプーティンは、チーズカードに包まれたサクサクのフライドポテトに、濃厚で風味豊かなグレービーソースをかけて構成されている。これらの材料を組み合わせることで、調和のとれた味わいのバランスが生まれる。

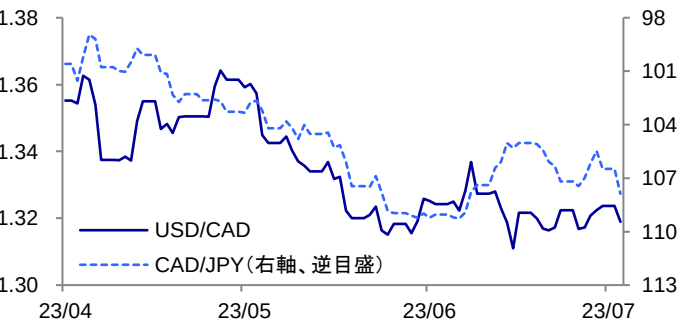
②メープルシロップ:カナダはサトウカエデの樹液から採取される高品質のメープルシロップで世界的に有名。甘党なら、メープルグレイズサーモン、メープルタフィー、またはパンケーキにかけたメープルシロップなど、メープルシロップ入りのおやつをぜひ試してみてください。

③大西洋ロブスター:カナダ東部の州、特にノバスコシア州とニューブランズウィック州は、おいしい大西洋ロブスターで知られている。茹でたり、蒸したり、ロールパン、ピスク、マカロニアンドチーズなどに使っても、シーフード愛好家の喜びである。

④ピーミールベーコン: カナディアンベーコンとしても知られるピーミールベーコンは、塩漬けにしてコーンミールで丸めた赤身の骨なし豚ロース肉から作られる。コーンミールの皮はサクサク、中はしっとりとした食感がたまらない。サンドイッチに入れて食べることが多い。

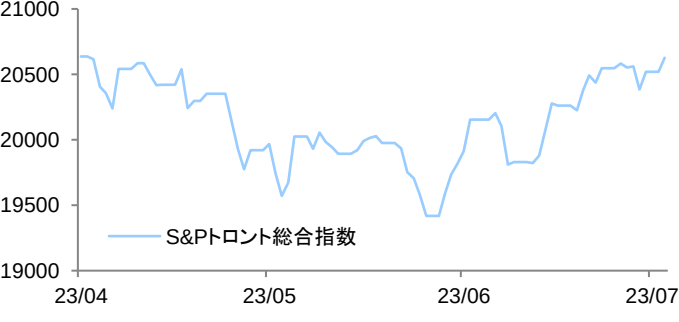
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	6月	-	48.8	49.0
7/7	雇用ネット変化率	6月	20.0K	59.9K	-17.3K
7/7	失業率	6月	5.3%	5.4%	5.2%
7/12	カナダ銀行翌日物貸出金利	7/12	5.00%	5.00%	4.75%
7/14	製造業売上高(前月比)	5月	0.8%	1.2%	-0.1%
7/18	CPI 季調前(前年比)	6月	0.3%	0.1%	0.4%
7/18	CPI(前年比)	6月	3.0%	2.8%	3.4%
7/18	鉱工業製品価格(前月比)	6月	-0.2%	-0.6%	-0.6%
7/21	小売売上高(前月比)	5月	0.5%	0.2%	1.0%
7/28	GDP(前月比)	5月	0.3%	0.3%	0.1%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1250	～	1320	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	10.76	～	11.36	
	JPY/KRW	8.80	～	9.30	

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

7月のドル/ウォン相場は下落後、後半にかけて下落幅を縮小する動き。月初3日のドル/ウォン相場は1,314.7ウォンでオープン。1316.4ウォンの月高値をつけた後は、韓国の貿易収支が16か月ぶりに黒字転換したことや、堅調な海外株式市場動向に支えられ軟調推移。4日に人民元高に相場が動意づく、ウォンが強含み一時1,300ウォンの節目を割れるも、5日に中国のPMI指数が軟調な結果となると、ウォンは再び弱含んだ。6日は前日夜間の良好な米経済指標結果を受け、ドル/ウォンは一時1,310ウォン台を回復。しかし、その後米6月雇用統計が弱い内容になったことで9月以降の米利上げ織り込みが後退。翌週初10日のドルウォンは1,299.0ウォンでオープンした。その後11日と12日は米6月CPIの発表を控え様子見ムードも、米6月CPIは弱い結果になるとの観測から米金利が低下したことで、ドル/ウォンは上値の重い推移。実際に12日夜間に発表された米CPIはインフレ減速を印象付ける内容になったことで米金利が低下し、ドル売りの流れに翌13日のドル/ウォンは1,270ウォン台で推移した。同じく13日にはBOKが4会合連続で政策金利の据え置きを発表するも、事前に想定されたとおりの内容だったことで市場の反応は限定的だった。14日にかけてもドル売りは継続し、1,260ウォンちょうど付近までウォンは強含んだ。翌週17日、18日もウォン買いの実需フローが強く、ドル/ウォンは一時月安値の1,257.3ウォンまで下落した。19日、20日は調整地合いから1,260ウォン台での推移が続いた後、21日に前日米国時間に半導体関連株が下落したことが材料となりウォンが急落し、一時1,285ウォン付近まで反発した。翌週は米・欧・日中銀会合を控える中、月末に関連した実需フローにより相場が上下動。24日は1,288ウォン付近まで上昇した後、高値圏で輸出勢によるウォン転フローが入り1,280ウォンを割り込み推移。25日、26日もウォンは上値重く推移し、概ね1,270ウォン台後半での値動きとなった。27日は前日米FOMCの結果から米金利が低下したことでも一時1,267ウォン付近まで下落するも、一巡後は上昇に転じた。28日は前日夜間のECB会合で利上げが決定されたことで、内外金利差の拡大が意識され1,283ウォン付近でオープンするも、じりじりとウォン買いが入り1,277ウォン付近で引けた。

■ 今月の見通し

8月のドル/ウォンは1,200ウォン台後半で揉みあい推移を予想する。

8月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。

①インフレ推移とFRBによる金融政策、②BOKによる金融政策

①7月FOMCにおいては市場予想通り25bpの利上げが決定された。その後パウエル議長は会見で9月以降の金融政策について「引き続きデータ重視のアプローチで臨む」と述べた。パウエル議長は米経済が景気後退を回避してソフトランディングする確率が高まっていると先行き経済に対する自信を深めるとともに、年内利下げに転じる可能性が低いことも強調。特段サプライズは無かったものの、9月以降の政策運営には不透明感が残り、8月は引き続き経済指標の内容などが取引材料となるも、次回会合まで2か月近く空き、9月にも同様の指標が発表される為、ドル/ウォンの方向感は定まりにくいだろう。

②7月13日にはBOK会合行われ、BOKは4会合連続で現行政策金利の維持を決定。韓国のインフレ率の伸びは低下基調が続いているものの、BOKは8月以降CPIは再び上昇に転じるとの見方を示しており、引き続き物価動向には警戒感を示している。今後の利上げについては、家計債務の増大やウォン安が進行した場合にあり得るとしながらも1,300ウォン前後の為替水準であれば、8月24日に予定される会合においても現状維持とする公算が高い。

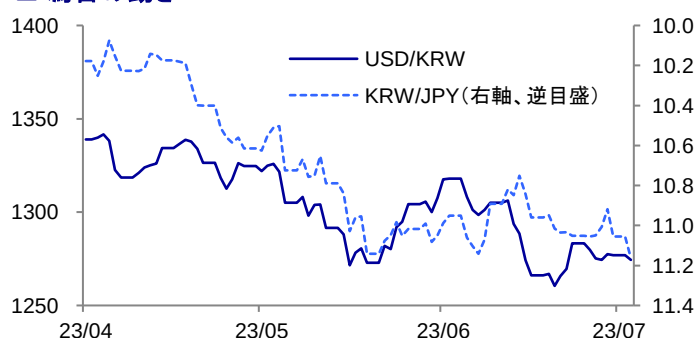
上記に加え、人民元動向がドル/ウォン相場に及ぼす影響についても注意したい。7月月初から米金利の低下とともに人民元安は一服しているものの、中国人民銀行が設定する対ドル基準値は市場実勢対比元高方向になる傾向が続いており、引き続き元安への警戒感を滲ませる。人民元が再び元安方向に動意づけば、ウォンは下落圧力が強まるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』
韓国料理は基本的にどれもお勧めです。私も当地に赴任して最初に感じたことは、ご飯が美味しいということでした。日本でもお馴染みの、ビビンバやチヂミ、サムギョプサルなどは勿論、本場の韓国では一段と洗練された味わいがあるような気がします。あと焼肉系のお店に行くと大体の場合が炭火なのも個人的にはポイントが高いです。マッコリやソジュなどを嗜めば、より一層食事が進みます。大体韓国旅行は2泊3日程度で計画されることが多いと思いますが、胃袋は常に満たされることを覚悟しておいたほうが良いと思います。明洞や市場の屋台で食べ歩きをしながら、少しずつ韓国料理を味見してみるのもお勧めです。

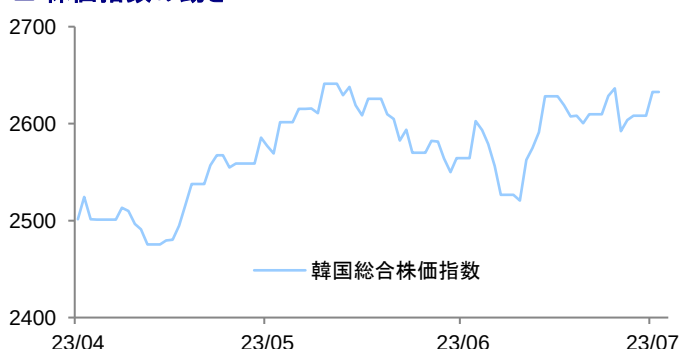
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	貿易収支	6月	1,500M	1,130M	-2,100M
7/1	輸出(前年比)	6月	-3.6%	-6.0%	-15.2%
7/1	輸入(前年比)	6月	-10.1%	-11.7%	-14.0%
7/4	CPI(前月比)	6月	0.2%	0.0%	0.3%
7/12	失業率	6月	2.6%	2.6%	2.5%
7/13	BOK政策金利	-	3.5%	3.5%	3.5%
7/21	PPI(前年比)	6月	-	-0.2%	0.6%
7/26	消費者信頼感	7月	-	103.2	100.7
7/28	鉱工業生産(前年比)	6月	-5.5%	-5.6%	-7.3%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.90 ~ 31.80
TWD/JPY 4.42 ~ 4.65

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドルは上昇。

月初の7月3日は31.135でオープン。台湾株が軟調に推移する中、外国人投資家の台湾ドル売りが拡大したものの、輸出企業がドル売りに出たことで31.1台前半で上値を押さえていたが、米国の追加利上げへの警戒感が高まり台湾株が急落すると、6日にはドル/台湾ドルは31.2台に乗せ、翌7日には31.3台まで急上昇した。

月央に入ると、米6月雇用統計にて労働市場の減速が意識される形となったが、米金利自体が依然として高い水準にあり、台湾国内からの投資送金が拡大し台湾ドル売りが優勢に。外国人投資家の台湾ドル売りフローも加わり、10日には31.3台後半まで上昇。11日には一時31.400ちょうどをつけたが、台湾株が反発すると31.3台前半まで下落。その後、米6月CPIが予想を下回り、インフレ鈍化が確認されると米金利の低下と共に米株が上昇すると台湾株も反発。台湾ドルも買い戻され、13日には31.1台を割り込んだ。さらに、米6月PPIも予想を下回ると、14日には30台に突入し、一時30.840をつけた。しかし、週を明けて17日にはドルが買い戻され、中国第2四半期GDPが市場予想を下回り、アジア通貨が売られるとドル/台湾ドルも31台に戻した。

月後半は台湾企業の配当金シーズンとなり、外国人投資家が海外へ送金を行うことから台湾ドル売りフローが強まった。21日は台湾株が下落したこともあり、31.2台に戻し、22日には31.3台半ばまで上昇。その後はFOMCを控え、様子見ムードが強まったが、FOMC後に米ダウ平均の上昇につられる形で、台湾株も上昇し、27日には31.1台半ばまで下落。しかし、好調な米経済指標を受けて米金利が上昇すると、再び上昇し、31.4台に乗せ、7/31には海外投資資金の拡大や配当金の海外への送金需要もあり、一時31.440まで上昇した。

■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドルは底堅い推移を見込む。

7月は前月からの台湾ドル安の流れが一旦は落ち着いたものの、月末にかけて台湾ドル安が進んだ。特に月後半は外国人投資家の受け取った配当金の海外送金需要もあり、台湾ドルは売られやすかった。

8月については、底堅い推移を見込む。足許は再び台湾株の動向に左右されやすい相場となっている一方、米長期金利が高水準で推移する中、債券投資のアウトフローもあり、ドル/台湾ドルの底値は堅いであろう。7月のFOMCでは景気後退を予想しておらず、引き締めスタンスが継続することが確認されており、当分の間は台湾国内の投資家動向についても注視していかなければならない。

一方、貿易動向をみると6月貿易収支は改善しているものの、輸入額の縮小によるところが大きく、輸出額は前年同月比のマイナス幅を拡大している。また、輸出受注額は前年同月比▲24.9%とこちらもマイナス幅が拡大しており、今後の輸出の回復についてはまだ不透明感が残っている。貿易動向からも台湾ドル高への期待は大きくない。

なお、GDPについては2期連続マイナスからプラスに転じた。個人消費が予想以上に伸びたものの、民間の設備投資が縮小しており、足を引っ張っている。台湾景気については設備投資、輸出動向は半導体需要に影響を受けており、半導体需要の回復はAI需要だけでは足りず、世界的な最終消費財の需要拡大にかかっており、世界経済の動向に左右されると見込んでいる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

日本人目線でおススメさせていただくと、果物が安くて美味しいです。台湾人から「なぜ日本人はマンゴーが好きなのか？」と聞かれますが、日本でのマンゴーの値段を伝えると、驚きと共に納得されます。スイカは年中見かけますが、日本より大きく、細長いです。日本では見かけないものだと、生のライチやドラゴンフルーツ、釈迦頭なども気軽に食べることができます。

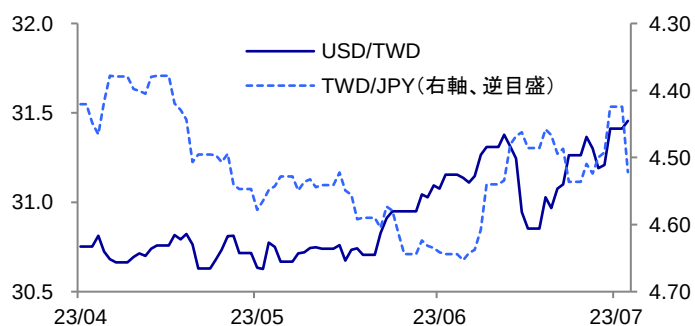
そのまま食べても美味しい果物ですが、街中のドリンクスタンドでは季節の果物を使ったドリンクが売られており、タピオカミルクティーよりフルーツ系ドリンクをおススメします。

また、暑い時期であれば、かき氷のバリエーションとして楽しむことができます(冬でもかき氷はありますよ)。映えるし、美味しいです。なお、台湾では通常のかき氷を刨冰(パオビン)、ふわふわ氷を雪花冰(シェホワビン)と区別します。日本の氷にシロップだけのかき氷はほとんど見かけず、豆やアイス、プリンなどが乗せられており、氷の上はトッピングで渋滞します。お店によってはプリンが手作りで美味しいので、私は最近、氷の上を渋滞させてがちです。

果物以外であまり日本人に知られていないとなると、胡椒餅でしょうか。カリカリに焼いた胡椒の効いた餡の肉まんです。夜市でも片手で食べられるので、おススメさせていただきます。

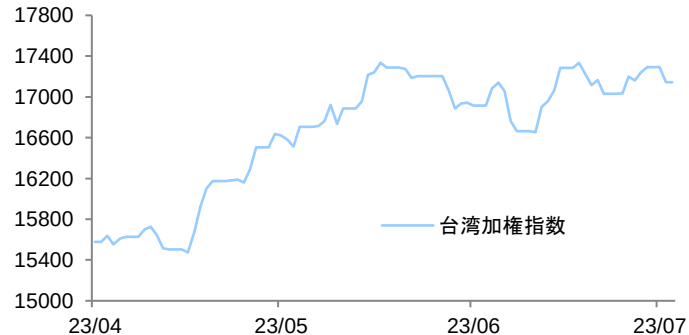
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	外貨準備高	6月	-	564.83B	562.87B
7/6	CPI(前年比)	6月	1.80%	1.75%	2.02%
7/7	輸出(前年比)	6月	-13.5%	-23.4%	-14.1%
7/7	輸入(前年比)	6月	-15.7%	-29.9%	-21.7%
7/7	貿易収支	6月	5.08B	5.96B	4.89B
7/20	輸出受注(前年比)	6月	-20.30%	-24.90%	-17.60%
7/24	鉱工業生産(前年比)	6月	-16.49%	-16.63%	-15.71%
7/24	失業率	6月	3.50%	3.45%	3.50%
7/28	GDP	2Q	0.80%	1.45%	-2.87%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7700 ~ 7.8400
HKD/JPY 17.20 ~ 18.70

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

流動性の逼迫により香港ドル短期金利が上昇した結果、米ドルと香港ドルの短期金利差が縮小し、香港ドル直物相場はペッグ制の中心値である7.80に向けて上昇した。香港ドルフォワード・ポイントは4月に底を打ち、T/Nについてはここ数週間、ゼロ近辺で推移している。これにより、市場参加者が米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードのポジション解消を加速させた。加えて、香港に上場している中資系企業の配当金ニーズも香港ドル直物相場の上昇圧力となったと言える。ただ、ストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による香港株式市場への資金流入は堅調だったものの、IPO活動は引き続き低調で、株式市場が香港ドルの下支え要因となることはなかった。経済指標に目を向けると、5月の小売売上高が市場予想を下回り、中国の成長鈍化と、中国本土の人々の購買力低下が域内消費の鈍化に繋がっていることが示された。香港の不動産価格も再び下落に転じている。しかし、6月の失業率は4年ぶりの低水準となる2.9%近くまで低下しており、労働市場が逼迫した状態であることを示している。

【7月の香港ドル金利市場】

香港ドルHIBORのO/N物は、6月末の高値5.75%から4%近辺まで低下したが、市中流動性の逼迫を反映し、1か月および3か月の香港ドルHIBORは5%を上回る高水準を維持した。米ドルペッグ制遵守の為、今年に入ってHKMAは香港ドル買い為替介入を複数回実施しており、アグリゲートバランスは450億香港ドル近辺まで減少している。流動性が大幅に引き締まったことから、香港の銀行が資金調達のためにHKMAの割引窓口貸出制度(ディスカウント・ウインドウ)を利用する頻度も上がった。また、米国連邦準備理事会(FRB)が25bpの追加利上げを実施した為、香港の銀行は住宅ローン事業の利益率を維持するため、プライムレートを12.5bps引き上げている。FRBの利上げサイクルが終盤に近づいているとの見方から、香港ドルスワップ金利は上値重く推移しているが、FRBの利下げへの転換はまだ先と予想されている。香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)は、香港ドルHIBORの上昇によりプラスに転じた。

■ 今月の見通し

【8月の香港ドル直物相場】

米ドルと香港ドルの短期金利差が縮小したことを受けて、キャリートレードの妙味が薄れていることから、香港ドル直物相場は引き続き堅調に推移するだろう。加えて、中資系企業の配当支払いによる香港ドル資金需要は、8月中も引き続き香港ドルを下支えするものと予想される。また、先日の中国政治局会議後以降、中国当局による景気刺激策強化に対する期待が高まっている。政策期待を背景に香港株式市場への資金流入が強まれば、これも香港ドルのサポート要因となる。香港ドル直物相場が7.80に近づくにつれ、FRBの利上げ打ち止め観測を強める兆候が見られれば、米ドル売り圧力が強まり、香港ドルも米ドルペッグ制の下限である7.75に向けて上昇する展開も考えられるだろう。

【8月の香港ドル金利市場】

FRBがすぐに利下げ方向に転換するとは考えにくい為、米ドルペッグ制の下、香港ドル短期金利は高止まりすると予想される。また、アグリゲートバランスについては現在の450億ドル近辺が均衡水準となるだろう。香港ドルの流動性が既に逼迫していることと、FRBの利上げ打ち止めが近いことを考慮すると、香港ドル直物相場がペッグ制の上限・下限それぞれに向けて一方向的に動く可能性は低い。するとHKMAによる為替介入が行われない為、アグリゲートバランスは現在の水準を保ち、香港ドル短期金利は米ドル短期金利に追随し続ける。香港の銀行は現在の流動性状況に適応しているようで、HKMAのディスカウント・ウインドウが頻繁に利用されるようになった。その為、HKMAは現在の流動性管理アプローチを維持し、為替基金証券(EFBNs)や利付債の発行を減らすことによる実質的な流動性供給手段は取らないだろう。

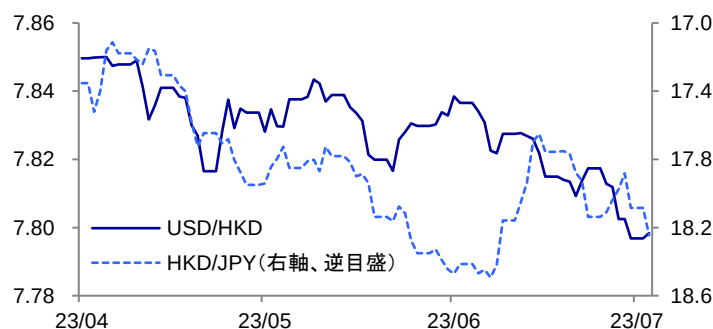
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

香港は有名なグルメスポットで、ローカル料理から世界各国の料理までバラエティに富んだ食事が楽しめます。香港で食事する場合、定番の選択肢はまず中華料理店で、地元の人々も中国茶や点心を楽しむためによく訪れます。その中でも、竹籠で蒸して食べるエビ餃子やシュウマイは必食です。点心以外では、ローストダック、バーベキューポーク、チャーシューといった中華風焼肉も多くのレストランで人気のメニューです。もう1つ定番なのは「茶餐廳」で、香港のファミリーレストランのようなお店です。これらのレストランでは、中華料理と西洋料理を融合させた様々な料理を提供しています。中でも人気なのは、目玉焼きとソーセージを冷たいレモンティーかミルクティーでいただく香港の伝統的な朝食セットです。ローカル料理を楽しみたいのであれば、様々な屋台が軒を連ねる通りを訪れてみるのもいいでしょう。フィッシュボール、臭豆腐、エッグタルトなどは屋台の定番料理です。ただし、香港の食べ物は何れもとてもおいしいので、ついつい食べすぎてしまう事にはご注意ください。これだけ美味しいものが沢山あるので、太ってしまうのも仕方ないかもしれません。

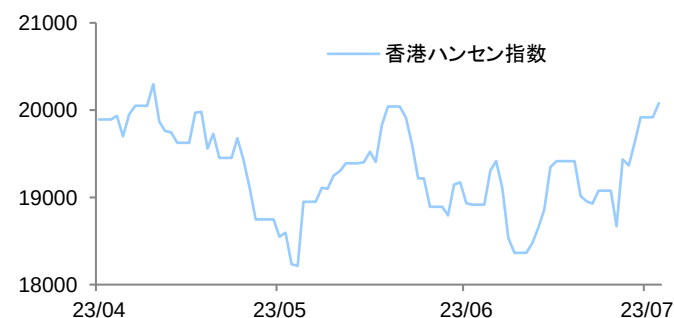
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	小売売上高(価額、前年比)	5月	22.6%	18.4%	14.9%
7/5	S&P Global Hong Kong PMI	6月	-	50.3	50.6
7/7	外貨準備高	6月	-	\$417.3b	\$421.0b
7/18	失業率(季調済)	6月	3.0%	2.9%	3.0%
7/20	CPIコンポジット(前年比)	6月	1.9%	1.9%	2.0%
7/25	輸出(前年比)	6月	-15.1%	-11.4%	-15.6%
7/25	輸入(前年比)	6月	-17.5%	-12.3%	-16.7%
7/25	貿易収支(HKD)	6月	-44.4b	-56.6b	-26.4b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.9000 ~ 7.3000
CNY/JPY 19.23 ~ 20.41
100JPY/CNY 4.9000 ~ 5.2000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉小絵

■ 先月の為替相場

7月のドル人民元(USDCNY)は上値の重い展開。

月初3日、USDCNYは7.25台でオープン。6月末頃から元高方向に設定されたPBOC基準値の市場予想とかい離が拡大する中で、USDCNYの上値が抑えられる格好。FOMC議事要旨の内容には特段のサプライズはなく、米雇用統計を控えた様子見ムードの中で方向感に乏しく推移した。7日7.22台半ばでクローズ。

10日、7.22台半ばでオープン。同日7.24台を付けた後はドル売りが優勢の展開。12、13日に発表された米6月CPI、PPIが予想を下振れる結果となり、米国の利上げ継続に対する思惑が剥落したこともドル売りをサポート、14日には一時7.11台を付けた。

17日、7.15付近でオープン。同日に発表された国内2QGDPや主要統計が予想を下回る結果が多かったことで元安が優勢となり19日には7.22台後半まで上昇。その後、20日には昨年10月以来となるマクロブルーデンス調整係数の引き上げが発表されたことなどをきっかけに元買いが強まり、19日のクローズ水準7.22台に対し20日は7.18台でギャップオープン。週後半は上値の重い推移となったが21日は7.16台から一時7.19台へ上昇した。

24日、7.18台でオープン。フロー主導で7.20台へ上伸する場面も見られたが、中央政治局会議の声明で不動産政策支援等について明らかとなったことを背景に元高優勢地合いで7.13台まで軟化。FOMCでは25bpの利上げを実施も市場は織込み済、パウエル議長会見でも特段のサプライズはなく値幅は限定的となった。28日は7.15付近でクローズ。

■ 今月の見通し

下値を試す展開を想定も、ドル高元安圧力には留意。

7月のFOMCでは25bpの利上げが実施された一方で、パウエルFRB議長の発言からは現時点での更なる利上げについて新たな情報を得ることができずドル安が優勢となった。しかしながら、翌日に発表された米2QGDPは個人消費や設備投資が堅調となったことで予想を上回り、米国経済が比較的安定していることが示されており、今後発表されるデータ次第では9月の利上げも十分あり得る。現時点では短期金利市場において年内の利上げが半分程度しか織り込まれておらず、今後も堅調な経済指標が続く場合には金利市場への追加利上げ織り込みと共に為替市場もドル高へ戻す展開には警戒が必要。

他方、中国においては7月24日に中央政治局会議(年央会議)の要旨が発表され、不動産セクターの最適化、地方政府の債務リスクコントロール、内需拡大、インフラ投資強化等について言及された。中国国内で2Qの経済成長低迷が顕著にみられる中、景気下支えの期待感が元買いへ繋がっており、今後も具体的な政策発表が続けば元高が更に進むと考える。

一方で経済対策の発表が一巡したり、引き続き軟調な国内経済指標が発表されると元高局面が終息する可能性も高く、再びUSDCNYが上昇する展開には留意したい。

その他、7月より中資系銀行ではドル預金の定期預金金利引き下げが行われていることや、企業の対外債務実施時のマクロブルーデンス調整係数の引き上げ等、ドル安元高に資する金融政策変更が相次いだ。また、人民銀行仲値を市場予想対比元高に設定する動きも続いた。再び元安局面に戻る場合には、7月に行われた動きが再度見られる可能性には警戒したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

世界三大料理の一つにもなっている中国料理ですが、地域によって特徴が様々です。

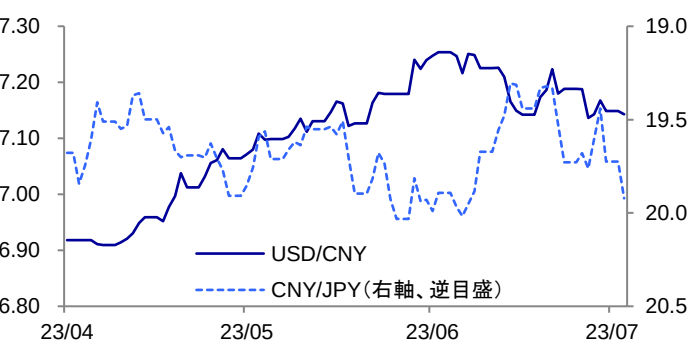
日本でよく知られているのは、上海料理・広東料理・北京料理・四川料理の中国四大料理と呼ばれる分類ですが、中国では、山東料理・四川料理・江蘇料理・広東料理・安徽料理・浙江料理・福建料理・湖南料理の八大菜系(中国八大料理)が最もポピュラーな分類と言われています。私が住んでいる上海では、各地方から人が集まっていることもあり、「○○料理」と地域の名前が書かれた看板のお店をよく見かけますし、この八大料理は一通り食べていると思います。

ただ、こちらに住んでいる方と話していると、上海で食べる地方料理と地方で食べる現地の料理の味は例え同じ名前のお店でも全然違うとのこと。チェーン店なら味は一緒でしょ？と思うのですが、当地で食べた方が断然美味しいのだそうです。確かに、敦煌という地方に旅行へ行った際に食べたラクダ肉はとても美味しかったですが、上海では食べる気すら起きません・・・。

さて、今回のテーマはお勧めフードということですが、甘いものから辛いものまで、ラクダや犬の肉から虫まで何でも食べることができる中国ですので、色々な食事やお店を試して自分好みの料理を見つけるのがお勧め、ということで締めさせていただきます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
6/30	製造業PMI	6月	49.0	49.0	48.8
6/30	非製造業PMI	6月	53.5	53.2	54.5
7/10	CPI(前年比)	6月	0.2%	0.0%	0.2%
7/10	PPI(前年比)	6月	-5.0%	-5.4%	-4.6%
7/13	貿易収支	6月	\$74.90b	\$70.62b	\$65.81b
7/17	工業生産(前年比)	6月	2.5%	4.4%	3.5%
7/17	小売売上高(前年比)	6月	3.3%	3.1%	12.7%
7/17	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	6月	3.4%	3.8%	4.0%
7/17	GDP(前年比)	2Q	7.1%	6.3%	4.5%
6/20	LPR1年物	-	4.20%	4.20%	4.20%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3100 ~ 1.3700
SGD/JPY 101.00 ~ 107.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は下落する展開となった。

月初3日にUSD/SGDは1.35台前半で取引を開始。米6月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ると一時1.34台前半まで下落。4日も全般的なアジア通貨買いの流れが続いたが5日に発表された中国6月財新サービスPMIが市場予想を下回ると反転し底堅い推移となった。6日は一時1.35を割り込むも、良好な米経済指標を受けドル買いが強まり1.35台半ばまで上昇。7日、米6月雇用統計の非農業部門雇用者数変化が市場予想を下回るとドル安の展開となり1.34台半ばまで水準を下げた。

10日、アジア時間は中国の冴えない経済指標を受けUSD/SGDは上昇も、海外時間に入り全般的なドル売りの流れとなると翌11日には1.34台前半まで下落。12日もドル売り優勢の展開が続く中、発表された米6月CPIが市場予想を下振れると1.32台後半まで水準を下げた。13日も米金利の低下基調が継続する中1.32台前半まで下落すると14日には1.31台後半まで続落した。

17日、中国4～6月期実質GDPの冴えない結果を受けSGD売りが強まる局面もあったがすぐに反落。18日、米6月小売売上高が市場予想を下回ると瞬時1.31台後半まで下げるもすぐに1.32台を回復。20日、中国人民銀行が企業や金融機関の外貨建て資金調達の上限を引き上げたことがアジア通貨のサポート材料となり1.32台後半まで上昇した。21日は日銀が翌週の会合でYCC変動幅を据え置く公算であると報道されUSD/JPYが上昇するとUSD/SGDも連れ高となり1.33台前半まで上昇した。

24日、目立った材料がない中、方向感に乏しい推移が続いたが、25日に入り米金利の低下を受けじり安となり1.32台後半まで下落。26日はFOMCにおいて政策金利の引き上げが決定となるも、今後の利上げについては「データ次第」とされたことでドル売りが進み1.32台前半まで下落した。27日、良好な米経済指標を受けドル買いが進行し1.33台を回復した。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は底堅い推移を予想。

先月開催されたFOMCにおいては25bpの利上げが決定された。今回の利上げ自体は事前に予想されていた通りであり、注目は追加利上げの有無に関する手がかりが得られるかという点であったが、パウエルFRB議長はFOMC後の記者会見において「データで裏付けられれば9月の政策決定会合で利上げを行う可能性は確かにある」と発言しており今後の利上げについてはこれから出てくるデータ次第であることを強調。FOMC直後にはドル売りで反応する局面も見られはしたものの、追加利上げの可能性はまだ残されている上、利下げについては年内はないとの見通しが示されている状況。インフレ圧力の低下を示すデータが連続して示されない限りはFRBがすぐに現在のスタンスを変更するドル売りの流れは強まりにくい状況であると考えており、今月という時間軸の中では引き続き追加利上げ観測は残りドル売り圧力は高まりにくい展開を想定する。

シンガポール国内の状況に目を向けると、6月CPIは前年同月比+4.5%となり、前月を▲0.6%ポイント下回り22年2月以来、1年4カ月ぶりの低水準となった。この結果を受けMASと貿易産業省は23年のCPI予測値を4.5%～5.5%とし、前月と比較して▲1.0%ポイント引き下げた。依然としてインフレ水準自体は高い水準で推移はしているものの、ピークアウトの兆しが確認できている状況であることを踏まえると一旦4月に金融引き締め打ち止めを決定したMASが再度金融引き締めに向かうとの思惑は高まりづらいと考えている。

USD/SGDについてはSGD要因というよりもUSDの動向に左右されやすい展開が続いている中、先月は米経済指標の下振れを受けUSD売り優勢となったが、上述の通り引き続きFRBに対する利上げ観測は残ると想定しており今月は下げ止まり底堅い推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

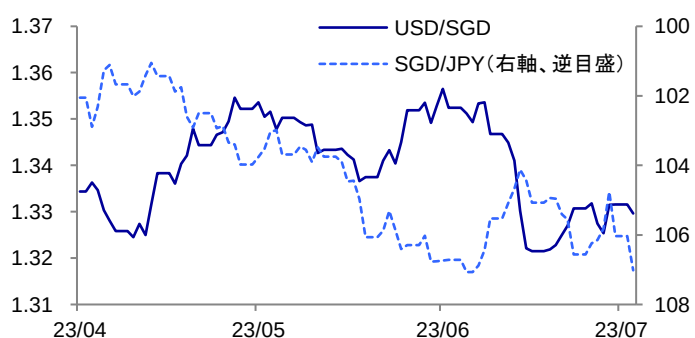
『当地のお勧めフード』
「チリクラブ」この5年超に及ぶ駐在期間にて、一体何体蟹の解体をしてきただろう。ゲストを受け入れる側としては「頼むから頼まないで」と願う名物ソウルフード。願い叶わず「チリクラブ！」と叫ばれた後には過酷な作業が待っている。とても使い辛い逆ニッパーみたいな道具で蟹を割らないといけなの。当然これをゲストに「自己責任で」とお願いするわけにはいかない。コツがいる解体作業は本当に大変なのだ。手どころが腕も汚れる。苦勞の割に可食部があまりない。チリの味は美味しいが、もうあまり接点を持ちたくないフードだ。

「オタ」シンガポール＆オタなどのワードで検索してみたい。見た目は全然美味しく無さそう。実際あまり美味しくない。だが名物のようだ。スタッフから「Must Try」と言われ注文すると、笹の葉の塊がドンと置かれて困惑する。笹を剥くとペースト状の謎肉が。どうやら魚肉の類らしい。食感はずごく微妙。とても辛くて匂いがキツイ。繰り返すが当地の名物のようだ。

「クレイフィッシュ・ヌードル」ある日スタッフにランチ購入を頼むと、ビニール袋に入ったスープ及び麺＆クレイフィッシュが入ったカップをドンと置かれる。クレイフィッシュ。即ちザリガニと麺が入ったカップを開けると強い異臭が。生臭いのだ。別添スープはビニール袋に入っており、これを上手に注ぐことは至難。案の定こぼしてしまい机が大変なことになった上に、生臭さはスープ投入後も変わらない。なおこのザリガニは皆様の想像を遥かに超えるレベルで大きい。そして悪魔的な見た目をしている。ぶりぶりだ。なお購入した張本人は美味しそうなおロボスター・ヌードルを購入し食べていた。選択肢あったんかいという突っ込みが音声ベースで口から出てしまった。(アジア・オセアニア資金部 成田)

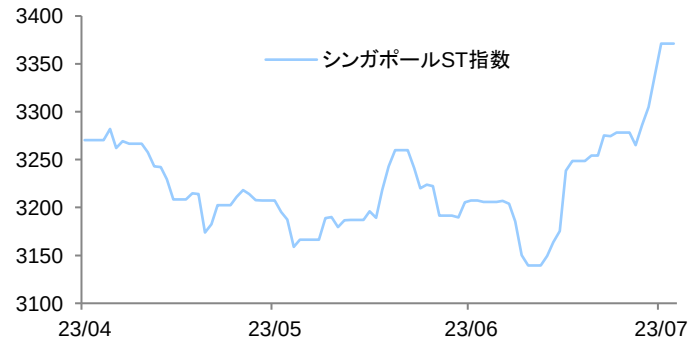
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	小売売上高(前年比)	5月	1.9%	1.8%	3.7%
7/14	GDP	2Q	0.5%	0.7%	0.4%
7/17	非石油輸出(前年比)	6月	-15.6%	-15.5%	-14.8%
7/24	CPI(前年比)	6月	4.4%	4.5%	5.1%
7/26	鉱工業生産(前年比)	6月	-6.0%	-4.9%	-10.5%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 33.90 ~ 35.10
THB/JPY 3.98 ~ 4.18

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

7月はタイ政治に関する多くのヘッドラインを確認しながらもドル安の流れで下落。35パーツ台前半で取引を開始。タイ総選挙後に下院議長をどの党が輩出するかで不協和音が囁かれていたが、前進党・貢献党でもない政党のベテラン議員が就任。不透明感が和らぎ、月初早々に35パーツちょうど近辺へ下落。6月FOMC議事要旨では、ほぼメンバー全員が追加利上げを想定していることが判明してドル高で反応。但し、7日の米6月雇用統計は雇用の伸びが鈍化した一方、賃金上昇が継続したため、為替相場は動意に欠ける動きとなり、35パーツ台前半を中心にレンジ推移。

中旬、米の中古車価格がコロナ禍直後に次ぐ下落幅を示し、米コアCPIの鈍化が意識されて35パーツを割り込んだが、米CPI発表前にタイ前進党ピター党首がメディア株保有問題で選管委員会により憲法裁へ提訴されたことが嫌気され、35パーツ前半まで急騰。但し、米6月CPIが予想に届かず、結果的に34パーツ台半ばへ下落。タイ首相指名投票ではピター氏当選とはならずも、1回では決まらないという見方が太宗だったため、影響は限定的。この後、タイ首相選挙にてピター氏が当選できない場合は連立を組む貢献党が首相候補を擁立すると報道されたため、これを好感して34パーツ台前半へと下げ幅を拡大。芳しくない中国の経済指標を受けてもドルパーツは上値重く、19日には2回目の首相指名投票直前にタイ選管委員会がピター氏を憲法裁へ提訴したことで同氏の議員資格が停止されたが、より貢献党からの候補擁立が意識される展開にドルパーツは遂に34パーツを割り込んだ。その後、予想を上回る英CPIによる英債利回り上昇に連れ高となった米金利を横目に34パーツちょうど付近へと下げ幅を縮小。

下旬、日銀関係者からのYCC修正に関する否定的な発言でドル円が上昇。これに引っ張られ、ドルパーツは34パーツ台半ばへ足早に戻した。月末週には日米欧主要中銀のイベントを目前にして、タイオンブズマン事務局が国会がピター党首の2度目の首相立候補を否決したことについて憲法裁に是非を問うと表明。また、タイ下院議長が候補日を示すことなく、2回目の首相指名投票を延期したが、ドルパーツは小動き。FOMCは利上げを織り込み済で無難に通過し、27日は34パーツ台前半でオンショアのクローズを迎えた。

■ 今月の見通し

8月のタイパーツ相場は底堅い展開を予想。2023年の上半期を終えて迎えた下半期、タイ政府が当初思い描いていた経済回復シナリオには黄色信号が灯っており、タイ国内の状況は良いとは言えない。通関ベースで9カ月連続前年割れをしている輸出の状況を受け、タイ財務省は2023年の経済成長率を▲0.1%ポイントだけ下方修正したが、これは輸出の鈍化のみならず、下院総選挙から既に2カ月が経過するも首相選出まで長期化の様相を呈していることが経済回復の足枷になることを織り込んだと推察される。

現状、与党第1党のピター党首に対する憲法裁の判断は保留されているものの、もしタイ選管委員会の申し立てが受理されるならば、前進党・貢献党を柱とする8党連立政権は実現困難となり、貢献党単独では政権が樹立できないため旧与党である軍政と手を組む可能性が意識される。そうなると民政推進に投票した多くの有権者を裏切ることでもデモが激化する可能性を否定できない。過去の例を見るとデモ激化は製造業よりも観光業に負の影響を与えていたことから、輸出に頼れないタイ政府が期待をかけている観光業回復すら鈍化してしまうため、年内後半のタイ経済に対する見通しは明るくなく、パーツ買いとはなりにくいだろう。

また、ドルパーツが底堅い展開になることを予想するもう一つの理由に7月FOMCを終えたばかりの米金融政策がある。25bp利上げ自体は想定済だったが、弱い米6月CPIやPPIを確認してもパウエル議長のスタンスに変化はなく、インフレ鈍化と労働市場の沈静化が継続して確認されない限りは新たなヒントが出てこないと思われる。米経済の見通しについても、最早リセッション入りは想定されていない。毎年注目されるジャクソンホールシンポジウムを8月下旬に控えているが、その前には米物価指標の発表がある。しかし、余程物価指標が予想を大きく下回らない限り、ジャクソンホールでのパウエル議長発言は7月FOMCの延長線上にあると予想される。そうすれば、市場が過度に米の利下げを織り込むこともなく、方向感に欠ける展開を生みやすい。

以上の観点から8月のドルパーツはドルよりもパーツの方が弱い要素を抱えていることから、底堅い推移を予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

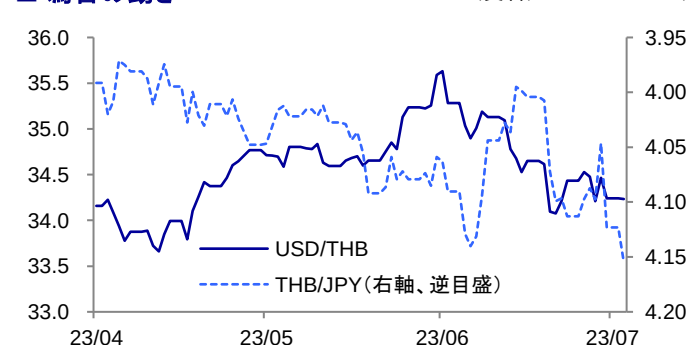
タイフードと言えば先ずトムヤムクンやパッタイが思い浮かびますが、当地のお勧めフードとして火山エビと呼ばれているエビ料理をご紹介します。タイはエビの養殖が盛んなので、至るところでエビ料理を楽しむことができますが、火山エビは見た目のインパクト大且つ美味しいローカルフードです。

火山エビはバンコク中心部から西へ車で約1時間のところにあるVolcano Prawn Restaurantというレストランで食べられます。オーダーの際にはキロ単位でエビの量を決めます。そうすると、火山型の容器で蓋をされた加熱済の殻付きエビが出て来て、店員さんが油に着火すると一気に燃え上がり、まさに火山エビという光景です。この時火の勢いが強いので要注意ですが、火は数秒で鎮火してしまうため、撮影チャンスを逃さないよう気を付けてください。

いざ実食すると、何とも言えない香ばしさとオリジナルの香味油が絡んだ弾けるエビの弾力が堪らない一品です。キロ単位で頼んでも複数人で食せば、あつという間に無くなってしまう、美味しさと着火パフォーマンス見たさに追加オーダーする可能性が高いと思います。そして、エビを完食すると、容器には見た目がマー油のような黒いエビ油が残っているのですが、これをチャーハンにかけて食べると更にチャーハンが美味しくなります。チャーハンにエビ油を追いかけるとかなりカロリー高いですが、美味しいものは脂肪と糖で出来ていると某CMにて学んでおりますので、仕方ないと自分に言い聞かせましょう！

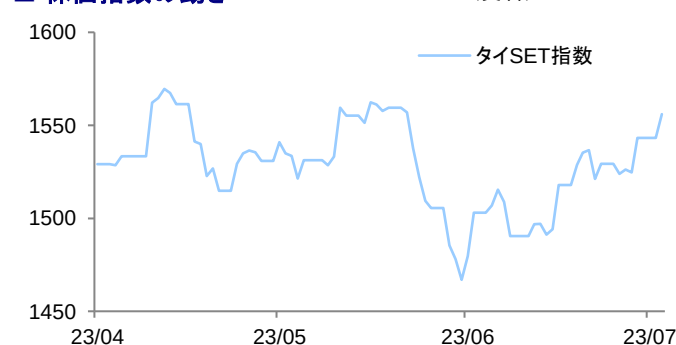
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	CPI YoY	6月	0.00%	0.23%	0.53%
7/5	CPI コア YoY	6月	1.40%	1.32%	1.55%
7/13	消費者信頼感指数	6月	-	51.2	50.2
7/25	自動車販売台数	6月	-		65,088
7/26	輸出(通関ベース) YoY	6月	-7.30%	-6.40%	-4.64%
7/26	輸入(通関ベース) YoY	6月	-7.75%	-10.30%	-3.16%
7/26	貿易収支(通関ベース)	6月	-\$900M	\$58M	-\$1,849M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.47	～	4.57
	MYR/JPY	30.41	～	31.36
	JPY/MYR	3.19	～	3.29

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月は米国における物価指標をきっかけとしたディスインフレ期待がのび、中旬にかけてUSD/MYRは急落。月間ベースでは3月以来のリング上昇となった。

上旬は売り買い交錯で4.65を中心に小幅なレンジで推移。3日発表の米ISM製造業指数が市場予想を下回った他、雇用指標も悪化が確認されたことでドルは軟調。馬中銀が短期市場で資金吸収したことでKLIBORは急上昇。期間1か月、3か月、6か月の金利は一週間で各々27、14、14 bpの上昇幅となり為替市場でもMYR買いが入った。6日発表の馬中銀政策会合は2か月連続のサプライズ利上げも一部で警戒されたものの、事前予想通り金利据え置きとなった。政策会合後も4.65近辺での取引が続いた。

中旬は米国で12日CPI、13日PPIが共に市場を下回る内容だったことで市場ではディスインフレが意識されドルは急落。USD/MYRは一週間で1400pipsの値幅を伴った下落となった。ドルは対主要通貨で全面安となったが、MYRはここ最近の低パフォーマンスを打ち返す堅調ぶりで当該週間ベースの主要通貨の為替騰落率で南アフリカZARに続く上昇率を記録した。17日には中国第二四半期GDP結果に失望した人民元売りやリビアの大規模油田での生産再開報道による原油価格下落を受けてややリング安に戻したが、20日に中国人民銀行による人民元中心レート引き上げ措置やマクロプルーデンス調整係数引き上げに伴う中国国外借入枠の増枠措置発表でリングは底堅く推移した。

下旬は24日に6月CPIが発表。全体としては国内インフレ鈍化を確認。中銀政策ではもう一段の利上げ余地を残すものの、足許のインフレ動向や政策金利がコロナ前水準に回復している点を踏まえると可能性は限定的と市場は見えており4.5台後半のリング安水準で推移。27日FOMCでは市場予想通り0.25%の利上げが決定された。内容的にサプライズ感はなく発表後は若干ドル安方向へ推移したことでUSD/MYRも4.52台まで下落。また日銀がYCC上限である0.5%水準の超過を許容したことでドル円他、アジア通貨全般でボラティリティが上昇した。

■ 今月の見通し

今月のリング相場は底堅い相場展開を予想する。先月は中旬にかけて相次いで発表された米国の物価指標を材料にドルが大きく値を下げる展開となりUSD/MYRは4.65から一気に4.52台まで下落した。その後ドルが買い戻される局面においても中国人民元に連れ高となる形でリングは底堅く推移しており、他のアセアン通貨と比較しても相対的に高パフォーマンスを示している。例えば6月FOMCから7月FOMC間の主要通貨の為替騰落率を一例として確認すると、アセアン5並びにシンガポールドル、インドルピーの中ではフィリピンペソに次いで約2.2%の上昇率を記録している。

一方、マレーシアの国内経済を見ると、当該期間で大きな状況変化は確認されず、リング上昇の主要因はドル下落と人民元の下げ止まりといった外的要因だった。今月18日に発表予定の第二四半期GDPで予想外の結果が示されればリング主導での上下変動する可能性があるため注意が必要だが、大きなサプライズがなければ、先月27日のFOMCを踏まえ、基本的な目線としてはドル上昇トレンド終焉が意識される地合を見込んでいる。次回FOMCは来月9月21日まで時間が空いており、米国CPIやPPIが足許順調に鈍化傾向を示す中、この流れが続けばドル安地合が続くと見ている。水準感としてはUSD/MYRの4.50割れが意識されており、この節目が突破すればリング買い戻しトレンド本格化が意識されよう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

マレーシアでお勧めと言うと中華系、マレー系、インド系と民族によってそれぞれあります。更にそのフュージョン系もあるので挙げ始めるとキリがないのですが、今回は王道の“ナシレマ”を紹介したいと思います。

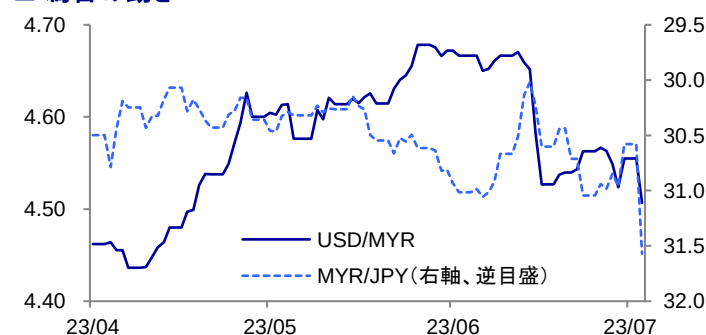
ナシレマはココナッツミルクで炊いたごはんに、小魚やナッツ、ゆで卵が乗っていて、そこにピリ辛のサンバルソースをかけながら食べるマレーシアで最もポピュラーな料理の一つです。レストランでも勿論食べる事はできるのですが、お勧めはやはりバナナの葉で三角形に包まれたナシレマです。朝の出動前に屋台で同僚の分も纏めて買って就業前にみんなで食べるのが私の好きなローカル流ナシレマの食べ方です。しかも一つ150円程度で購入できてお財布にも優しい素敵な朝ごはんです。

中華まきの様に(バナナの葉ですが)葉っぱで包まれた料理ですので、葉っぱを広げると中に入っている具は結構混ざっており、ピリ辛サンバルソースを避けて食べるのはほぼ不可能です。ピリ辛が苦手の方には難儀な料理ですが、このごちゃごちゃした感じがたまらなく日本人でも虜になった方は結構いらっしゃいます。ナシレマに入る定番のトッピングおかずとしては鶏肉だと思いますが、私が行く屋台で買う時はたいいイカの辛子煮をチョイスします。朝から食べるには少々臭いが気になる所ですが、何とも言えない深い味わいですし、みんなで渡れば怖くない精神でナシレマの日は朝から課内の部屋が臭いで充満します。それがまたローカルアジアな雰囲気です。

ナシレマはサンバルソースの味が決め手と言われますが、個人的にはやはりみんなで食べる一体感も一段の美味しいスパイスになる気がします。

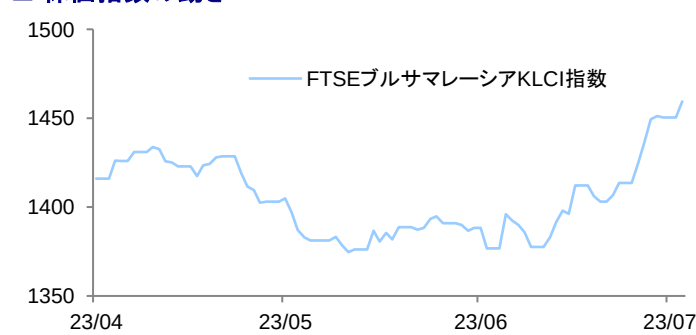
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/6	BNM Overnight Policy Rate	Jul 6	3.0%	3.0%	3.0%
7/7	Foreign Reserves	Jun 30	—	\$111.4b	\$113.0b
7/12	Industrial Production YoY	May	0.0%	4.7%	-3.3%
7/20	Imports YoY	Jun	-16.5%	-18.9%	-3.3%
7/20	Trade Balance MYR	Jun	16.65b	25.81b	15.42b
7/20	Exports YoY	Jun	-14.0%	-14.1%	-0.7%
7/24	CPI YoY	Jun	2.40%	2.40%	2.80%
7/24	Foreign Reserves	Jul 14	—	\$111.8b	\$111.4b

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14950 ~ 15400
IDR/JPY 0.9091 ~ 0.9524
JPY/IDR 105.00 ~ 110.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

7月のルピアは対ドルで小幅に下落。

月初3日、ドルルピアは15000台前半で取引を開始。発表されたインドネシアの6月インフレ率は前年同月比+3.52%となり、2か月連続で中銀の定めるインフレ誘導目標のレンジ内となったが、為替市場の反応は限定的となり15000台前半から半ばにかけての狭いレンジ内で推移。5日海外時間に発表された米FOMC議事要旨において、さらなる利上げの可能性が示唆されたことを受け、ドル買いが優勢となるとルピアは対ドルで下落。翌週10日にかけてルピア安が進展し一時15200台前半をつけた。その後は米CPIの結果を控える中ドルが売り戻される動きとなると徐々にルピアは対ドルで反発。12日海外時間に発表された米CPIの結果が市場の事前予想を下回ったことを受け、ドルが一段安となると翌13日アジア時間オープンにはルピアは14900台半ばまで上昇幅を拡大させた。14日にかけて14900台前半までルピア高が進展したが、海外時間に発表された米指標が市場予想を上回ったことを受け、ドルが反発。翌週17日には14900台後半までルピアは対ドルで下落、翌週にインドネシア中銀会合・FOMC会合を控える中、15000近辺で動意薄く推移。25日、インドネシア中銀は政策決定会合において政策金利の据え置きを決定。事前の予想通りであり、市場への影響は限定的となった。翌26日海外時間にはFOMC会合において0.25%の利上げが決定された一方、パウエル議長の見解はハト派と受け止められドルが下落。翌27日のドルルピアは14900台後半で取引を開始したが、月末が近づく中で実需のルピア売りも散見される中15000台に値を戻し、月末にかけてルピア安が継続し1500台後半で取引を終えた。

■ 今月の見通し

8月のルピアは軟調な値動きを予想。

インフレ率の低下はインドネシア中銀の想定を上回るペースで鈍化しており、6月CPI(総合)は前年比+3.5%と5月に引続き中銀の定めるターゲットレンジである2-4%内まで低下。同指標の低下の主な要因としては食料品価格上昇のペース効果が剥落したことがあるが、食料品・燃料費価格の影響を除いたコアCPIも小幅ながら低下傾向を維持しており、引続き目標レンジ内で推移することが予想される。

インフレ率が鈍化する中、インドネシア中銀は7月の政策会合においても政策金利の据え置きを決定。会合後のペリー総裁の会見においては中国経済の先行きに対して警戒感を示した一方で、国内経済については従前の予想対比活発化しているとし、2023年の実質GDP成長を前年比+4.5~+5.3%に据え置いた。

中国景気鈍化による影響はインドネシア国内景気にとっても逆風となり得るが、内需依存型の同国内景気は外需依存の高い他のアジア国対比で堅調に推移している現状において、利下げへ踏み切る必要性はさほど高くはないと考える。

加えて、7月のFOMC会合において0.25%の利上げが決定されている中、利下げへ動くとなると為替水準への影響も考慮せざるを得ないだろう。昨年後半以降、資源価格下落の影響を受け貿易収支の黒字幅が縮小しており、実需の面からルピア売り圧力が強まっていると考えられ、足元でルピアは徐々に対ドルで下落幅を拡大しており、仮にインドネシア中銀が利下げへ動くとなると通貨安に拍車をかける可能性がある。

利下げによる国内景気へのテコ入れ効果と、為替水準への影響を天秤にかけ当面は利下げは行わず現状の政策金利水準を据え置くものと予想。他方で米国は追加利上げの可能性を残しており、ルピアは対ドルで軟調な推移が継続するものと予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお勧めフード』

当地の人気の食べ物は揚げ物やココナツミルクを使ったものが多く、ヘルシーなものがあまりない。一つヘルシーなものをお勧めしますと、ガドガドという伝統的なサラダです。

ガドガドはインドネシア語で文字通り「ミックスミックス」を意味し、ジャガイモ、長豆、もやし、ほうれん草、ハヤトウリ、ゴーヤ、トウモロコシ、キャベツなどの野菜と豆腐、テンペ、ゆで卵など、野菜を豊富に混ぜ合わせて作られています。すべてピーナツソースドレッシングに混ぜられ、時にはクルブクや揚げエシヤロットのふりかけがトッピングされることもあります。

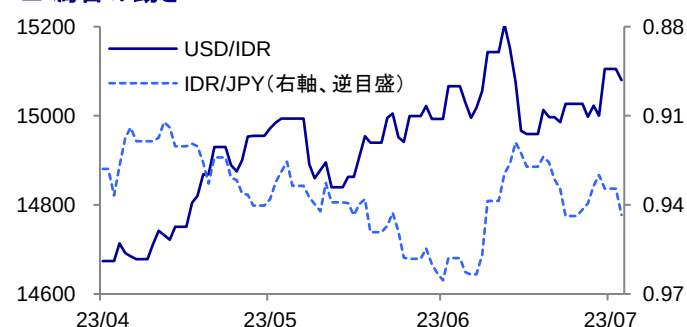
ピーナツソースドレッシングは揚げたピーナツ、パームシュガー、唐辛子、ライムの汁、トラシ、タマリンドの汁、すりおろしたニンニク、ケチャップマニスなどを混ぜ合わせて作られます。

当地では軽食やおかず料理であるが、軽食の場合米をバナナ葉に包んで茹でたロントンと呼ばれるライスケーキを切ったものを付けあわせる場合が多い。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

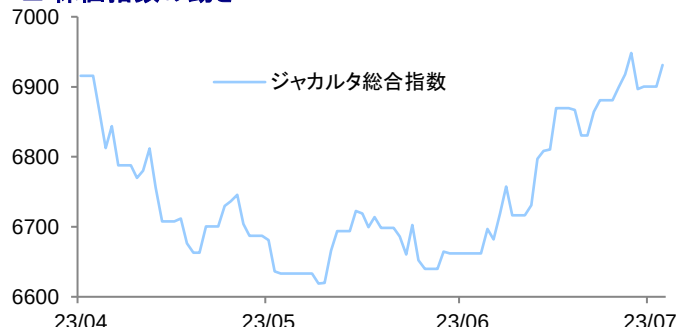
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	CPI(前年同月比)	6月	3.62%	3.52%	4.00%
7/17	貿易収支(USD M)	6月	1,162	3,460	430
7/17	輸出(前年比)	6月	-17.80%	-21.18%	0.93%
7/17	輸入(前年比)	6月	-4.20%	-18.35%	14.35%
7/25	BI7daysリバースレポ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 53.50 ~ 56.50
JPY/PHP 0.37 ~ 0.41

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榊 雄一郎

■ 先月の為替相場

6月の比製造業PMIが50.9と50を上回るも、約1年振りの水準に低下したことが嫌気されたほか、6月の比消費者物価指数が前年同月比5.4%と市場予想の5.5%を下回り、5か月連続で低下し、約1年ぶりの水準となったことを受け、比中銀がより長期に渡って政策金利を据え置くとの観測が高まったことが、ペソ安材料となった。また、6月の米雇用統計の結果が賃金上昇圧力の根強さを示す内容となり、7月FOMCでの利上げの見方が強まり、ドルが広範囲に上昇したこと、6月は月を通して、上昇基調となっていたペソは、7月上旬はペソ安基調に転じ、1米ドル＝55ペソ台半ば付近まで下落。

しかしながら、中国の更なる景気対策への期待からリスクセンチメントが改善し、アジア通貨が全面高の展開となるなか、5月の比貿易赤字が輸出増加を受けて予想外に縮小したことがペソのサポート材料となったほか、6月の米消費者物価指数の大幅鈍化を受けて、米引き締めサイクル終了が近いとの観測が高まり、ペソは水準を大きく切り上げ1米ドル＝54ペソ台半ばまで上昇。6月の米生産者物価指数が約3年振りの低い伸びとなり、物価上昇圧力の緩和が示されたことから、利上げ織り込みが剥落し、ドル一段安となったほか、比中銀レモナ総裁はインフレのリスクが上方向にあるなか、利下げの議論は早いとし、更なる引き締めの可能性について示唆したことを受けて、ペソは月半ばに、約3か月半ぶりの水準まで上昇。

ペソ上昇一服後は6月のフィリピンの国際収支が6.06億ドルの赤字と前月の4.39億ドルから赤字幅が拡大したことからペソ反落となる局面も見られたが、総じて材料に欠けるなか、FOMCを控えて、様子見ムードが強くなり、1米ドル＝54ペソ台後半でのレンジ推移となった。FOMCは大方の予想通りの結果となり、パウエル議長の記者会見は警戒した程タカ派な内容ともなわなかったことから、米金利低下からドルが押し下げられ、ペソは小幅上昇で反応となったが、相場を方向付ける材料とはならず、月半ばからのレンジ推移が継続する展開となった。

■ 今月の見通し

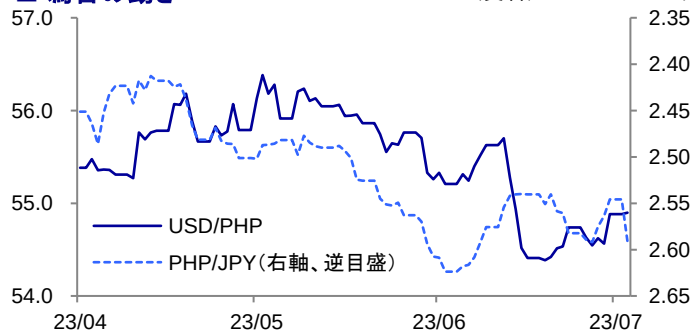
7月のFOMCでは最近の複数の指標は経済活動が緩やかなペースで拡大を示唆し、労働市場の逼迫も継続しており、インフレは依然として高水準にあるなか、あくまでもデータ次第としながらも、更なる利上げの可能性も示され、市場も11月会合での追加利上げを4割程度織り込んでいる。インフレ鈍化と労働市場逼迫といった材料が混じるなか、米金融当局は今後の追加利上げの選択肢を残しているが、リセッションはもはや見込んでないとするも、成長の顕著な減速が年内に始まると予想している。今後、景気が軟化して、信用状況の引き締めからインフレ鈍化基調は継続する見込みが高く、米引き締めは最終局面にあるとの見方の一方、インフレ警戒姿勢を堅持する中、市場が早期利下げを織り込み、インフレ期待を再燃させることがないよう、利下げといった議論も当面は想定されない中、年内は政策金利が据え置かれる公算が高く、米金利は方向感に欠ける展開となる可能性が高い。

フィリピンについてはインフレは鈍化基調を維持し、今年第4四半期にはターゲットレンジに戻るとの見通しの中、現行水準での当面の政策金利据え置きが見込まれているが、インフレリスクが上方向にあるなか、年内利下げ検討可能との見解を当初示していたフィリピン中銀のレモナ総裁も利下げの議論は早いとし、データ次第では更なる引き締めに示唆している。賃金上昇、天候不良による食品価格上昇、ペソ安による輸入物価上昇といった可能性を踏まえ、フィリピン中銀は引締めのスタンスを維持しているため、米国とフィリピンともにタカ派的据え置きが見込まれるなか、政策金利差という観点からはドルペソ相場に明確な方向感を見出しづらい。

足許は米引き締めサイクル終了が近いとの見方から、ドル主導の相場となり、ドル安ペソ高が進んだが、当面の米政策金利据え置き観測から、ドルは下落一巡後は底堅く推移することを見込む。また、フィリピンの貿易赤字は縮小しているが、依然として高水準で推移しており、今後も内需の強さから需給面ではペソが売られやすい環境が続き、基調としては緩やかなペソ安を想定する。フィリピン中銀は必要に応じて政策を調整する用意があるとしているほか、介入の思惑もあり、現行水準からペソ安が大幅に進んだ場合はこれらがペソ支援材料となろう。

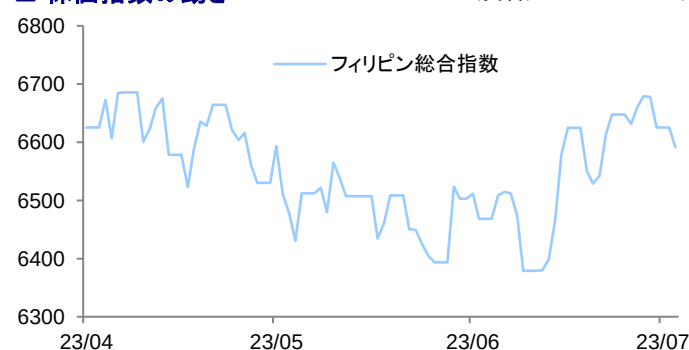
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
上記参照			

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 81.60 ~ 83.00
INR/JPY 1.64 ~ 1.78

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは狭いレンジ内で往ってこいの展開】

82台前半水準で当月取引を開始。月初は、じり安の流れが継続し一時83水準に迫る水準までルピー安の展開となるも、インド中銀からの為替介入（インドルピー買い）による上値抑えはしっかりと見られ、節目を意識した動きは継続している。その後、米6月雇用統計が芳しくない結果に終わり、じりじりと続いていたドル高圧力から急速に剥落、加えて米物価統計の鈍化が拍車をかける展開に、ドル安の流れに転じる展開に併せて、ルピー高が進行。月後半にかけて、82水準を下回る局面も散見されたものの、81.65～75水準ではインド中銀からの下支えの為替介入（インドルピー売り）および月末付近での実需勢からのアウトフロー（インドルピー売り）も散見され、底堅い動きに。その後は一部水準を取り戻し、結局82水準をやや下回る水準にてクローズとなった。（27日時点）。

SENSEXは、一時67,500水準を超える水準まで上昇、年初来高値を更新する展開も、その後は一部調整の動きに。月初は、米国の追加利上げを嫌気した売り圧力で値を下げる局面も散見されたものの、総じて外国人投資家からの資金回帰は顕著な状況が継続しており、インド市場に対する資金流入は依然活発。利益確定売りの動きもあってか、水準調整の局面となるも下値は底堅い様相。

インドの経済指標では、発表された6月製造業/サービス業PMIは、市場予想対比では悪化する結果に。注目された6月消費者物価指数（CPI、前年比）は、+4.81%と前回の+4.60%から上昇した。来月のMPCに向けて、利上げ効果を見極める重要指標であるが、低下基調から上昇に転じていることで、ベース効果剥落の顕在化の様相も。5月鉱工業生産は、市場予想を上回る結果となる一方、6月貿易収支は赤字幅が拡大し、赤字体質は常態化している。

■ 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開か】

8月においては、節目83水準を上限とした上値の重い展開を見込む。引き続きインド中銀からの為替介入による狭いレンジ内でのアンダーコントロールが続いている状況は不変と想定しつつ、インドに対するインフロー増加に伴う上値抑えも寄与してくる恰好か。一方、実需勢からのフローについても、81後半～82後半水準での動きが散見されており、目先はインド中銀含めて同水準が心地良いのかもしれない。

インドCPIについては、昨今の天候不順による食料価格の高騰もあり、一部では+5.0%台に今後上昇する可能性も想定されている状況。直近インドCPIは、ベース効果の観点もあり低下基調であったものの、前月発表のインド6月CPIは前回対比上昇し、利上げ効果の波及を見極めるフェーズに。斯かる中、リスク警戒としては8月のMPCにて、再度の利上げ路線への転換の可能性についても視野に入れておきたい。

中長期的には、米国利上げの終点・利下げ開始（来年以降を想定）に伴う、ドル安/新興国通貨高（インドルピー高）の圧力の顕在化が訪れる想定であるが、前述の下値におけるインド中銀からの為替介入による下支えおよび実需勢からのアウトフロー（インドルピー売り）から、ダイレクションが大きく転換するよりは、緩やかなインドルピー安への相場回帰を考えておきたい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

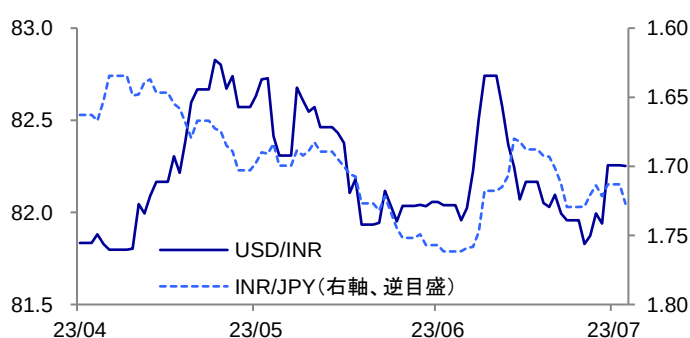
『当地のお勧めフード』

当地に移住してから、ペスカタリアン（魚介類は食べる菜食主義）となった私ですが、当地では宗教的な理由などからベジタリアンの食の選択肢がとて多く、ベジタリアンでも十分美味しいものを食べられる（たまにハズレあり）。

ペスカタリアンといっても海が遠いニューデリーに住んでいるため新鮮な魚介類を食べる機会があまりなく、ほとんど毎日ベジタリアン生活なのだが、最近になりフィッシュカレーの美味しさに気がつきとてもハマっている。小ぶりでもない魚が頭ごとカレーの中に入っており、さらにごつい骨もゴロゴロあるので非常に食べ辛く、何の魚を食べているのかもよくわからないのだが、味はとても美味しい。特にココナッツミルクとトマトのクリーミーなグレイビーの中にサバが入っているフィッシュカレーが絶品だった。インドは本当に多様性があり食べ物に関してもたくさんのバラエティーがあるため、インドに訪れた際はぜひ色々なものに挑戦をして自分のお気に入りの食べ物を見つけてほしいと思う。（インド営業部ニューデリー 七戸）

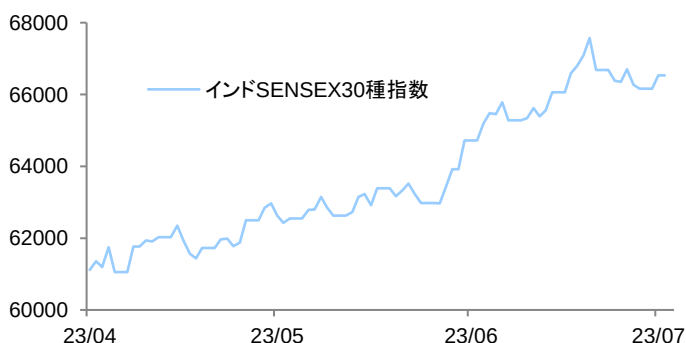
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/3	製造業PMI
7/5	サービス業PMI
7/12	鉱工業生産
7/12	CPI
7/14	貿易収支

（資料）ブルームバーグ

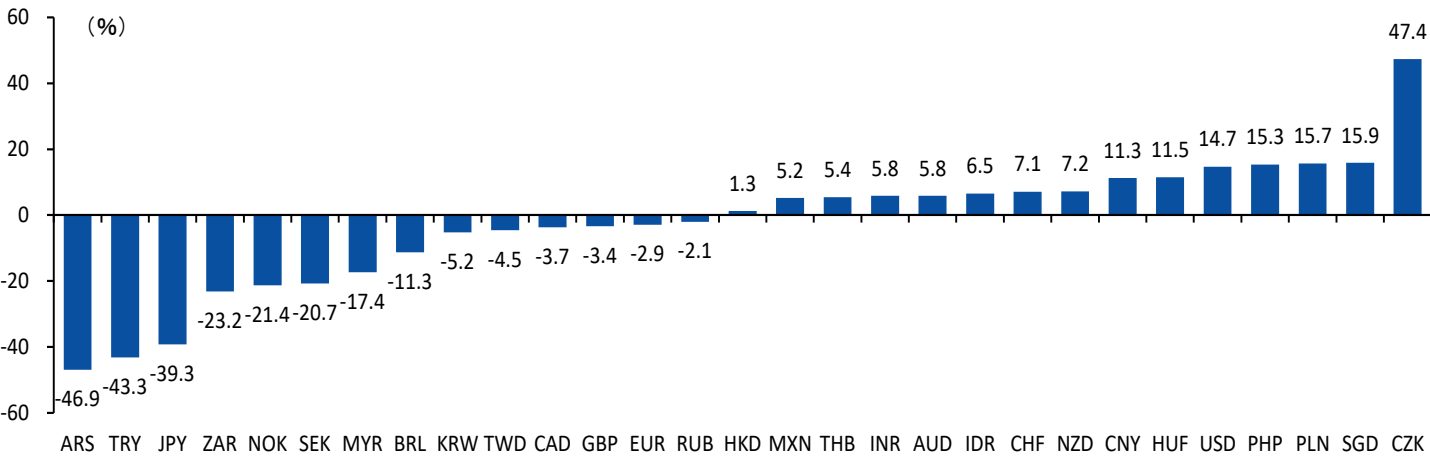
期間	予想	結果	前回
6月	-	57.8	58.7
6月	-	58.5	61.2
5月	5.00%	5.20%	4.50%
6月	4.60%	4.81%	4.25%
6月	-19,950	-20,133	-22,119

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年7月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	35559.53	7.3%	-
日本	USD/JPY	131.12	142.29	8.5%	日経平均株価	26094.5	33172.22	27.1%	17.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.0997	2.7%	ドイツDAX指数	13923.59	16446.83	18.1%	18.1%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2835	6.2%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7699.41	3.3%	-2.7%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6717	-1.4%	S&P/ASX200指数	7038.688	7410.424	5.3%	6.8%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.319	-2.7%	S&PTロント総合指数	19384.92	20626.64	6.4%	9.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	7.1428	3.5%	上海総合	3089.258	3291.04	6.5%	2.9%
香港	USD/HKD	7.8016	7.7984	0.0%	香港ハンセン	19781.41	20078.94	1.5%	1.5%
インド	USD/INR	82.735	82.2525	-0.6%	インドSENSEX30種	60840.74	66527.67	9.3%	10.0%
インドネシア	USD/IDR	15573	15080	-3.2%	ジャカルタ総合	6850.619	6931.359	1.2%	4.5%
韓国	USD/KRW	1260.33	1274.36	1.1%	韓国総合株価	2236.4	2632.58	17.7%	16.4%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.507	2.3%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1459.43	-2.4%	-4.6%
フィリピン	USD/PHP	55.741	54.898	-1.5%	フィリピン総合	6566.39	6591.47	0.4%	1.9%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3296	-0.7%	シンガポールST	3251.32	3373.98	3.8%	4.5%
台湾	USD/TWD	30.73	31.455	2.4%	台湾加権	14137.69	17145.43	21.3%	18.5%
タイ	USD/THB	34.608	34.234	-1.1%	タイSET	1668.66	1556.06	-6.7%	-5.7%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	7.0	-1.6	-0.6	3.2	2.6	2.0	2.4	5.9	2.1
日本*	5.0	-2.7	5.6	-1.5	0.4	2.7		2.3	1.1
ユーロ圏	4.8	5.4	4.2	2.4	1.7	1.1	0.6	5.4	3.3
英国	8.9	10.6	3.8	2.0	0.6	0.2		7.6	4.1
豪州	4.6	3.1	3.1	6.0	2.6	2.3		5.3	3.7
カナダ*	6.9	2.6	3.6	2.3	-0.1	3.1		5.2	3.5
エマージングアジア									
中国	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	8.4	3.0
香港	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.1	2.9	1.5	6.4	-3.5
インド	5.2	4.0	13.1	6.2	4.5	6.1		6.5	9.1
インドネシア	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0	5.0		3.7	5.3
韓国	4.3	3.1	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	4.3	2.6
マレーシア	3.6	4.8	8.8	14.1	7.1	5.6		3.1	8.7
フィリピン	7.9	8.0	7.5	7.7	7.1	6.4		5.7	7.6
シンガポール	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	0.4	0.7	9.1	3.7
台湾	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.8	-2.9	1.5	6.5	2.4
タイ	1.9	2.2	2.5	4.6	1.4	2.7		1.5	2.6

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/11	22/12	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.6	3.5	3.4	3.6	3.5	3.4	3.7	3.6	5.4	3.6
日本	2.5	2.5	2.4	2.6	2.8	2.6	2.6		2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.7	6.7	6.6	6.6	6.5	6.5		7.7	6.7
英国	3.7	3.7	3.7	3.8	3.9	3.8	4.0		4.6	3.7
豪州	3.5	3.5	3.7	3.5	3.5	3.7	3.5	3.5	5.1	3.7
カナダ	5.1	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.2	5.4	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	3.7	3.5	3.4	3.3	3.1	3.0	3.0	2.9	5.4	4.3
インドネシア				5.5					6.4	5.9
韓国	2.8	3.1	2.9	2.6	2.7	2.6	2.5	2.6	3.6	2.9
マレーシア	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	3.5			4.6	3.8
フィリピン	4.2	4.3	4.8	4.8	4.7	4.5			7.8	5.4
シンガポール	2	2	1.9	1.9	1.8	1.8	1.9	1.9	2.7	2.1
台湾	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5	3.5	4.0	3.7
タイ		1.2			1.1					

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/10	22/11	22/12	23/01	23/02	23/03	23/04	23/05	23/06	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	7.7	7.1	6.5	6.4	6.0	5.0	4.9	4.0	3.0	4.7	8.0
日本	3.7	3.8	4.0	4.3	3.3	3.2	3.5	3.2	3.3	-0.3	2.5
ユーロ圏	10.6	10.1	9.2	8.6	8.5	6.9	7.0	6.1	5.5	2.6	8.4
英国	11.1	10.7	10.5	10.1	10.4	10.1	8.7	8.7	7.9	2.7	9.1
豪州			7.8			7.0			6.0	2.9	6.6
カナダ	6.9	6.8	6.3	6.3	5.9	5.2	4.3	4.4	3.4	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.1	1.6	1.8	2.1	1.0	0.7	0.1	0.2	0.0	0.9	2.0
香港	1.8	1.8	2.0	2.4	1.7	1.7	2.1	2.0	1.9	1.6	1.9
インド	6.8	5.9	5.7	6.5	6.4	5.7	4.7	4.3	4.8	5.1	6.7
インドネシア	5.7	5.4	5.5	5.3	5.5	5.0	4.3	4.0	3.5	1.6	4.2
韓国	5.7	5.0	5.0	5.2	4.8	4.2	3.7	3.3	2.7	2.5	5.1
マレーシア	4.0	4.0	3.8	3.7	3.7	3.4	3.3	2.8	2.4	2.5	3.4
フィリピン	7.7	8.0	8.1	8.7	8.6	7.6	6.6	6.1	5.4	3.9	5.8
シンガポール	6.7	6.7	6.5	6.6	6.3	5.5	5.7	5.1	4.5	2.3	6.1
台湾	2.7	2.4	2.7	3.1	2.4	2.4	2.4	2.0	1.8	2.0	3.0
タイ	6.0	5.6	5.9	5.0	3.8	2.8	2.7	0.5	0.2	1.2	6.1

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.4	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.6	-3.8
日本	4.2	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	1.6	3.9	2.1
ユーロ圏	2.8	2.3	1.6	0.6	-0.7	-0.7	-0.2	2.3	-0.7
英国	-3.0	-1.5	-3.2	-4.2	-3.8	-3.8	-2.1	-1.5	
豪州	3.4	3.0	2.3	2.0	0.9	1.1	1.4	3.0	1.1
カナダ	-0.6	-0.3	-0.1	0.2	-0.1	-0.3	-0.7	-0.3	-0.3
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.0	2.2
香港	10.0	11.8	12.6	10.9	11.6	10.5	8.8	11.8	10.5
インド	-0.5	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.1	-2.4
インドネシア	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	1.0	1.2	0.3	1.0
韓国	5.6	4.9	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6	4.7	1.8
マレーシア	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1	2.7	2.8	3.5	2.7
フィリピン	0.3	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.4	-1.8	-4.4
シンガポール	17.0	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.5	18.0	19.3
台湾	15.0	15.2	15.5	14.8	14.2	13.4	12.1	15.2	13.4
タイ	-1.7	-2.1	-2.2	-3.2	-4.0	-3.5	-2.4	-2.1	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2023/7/26	+25bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/7/28	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.75	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/7/27	+25bp	2023/7/27	+25bp
英国	バンク・レート	5.00	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/6/22	+50bp	2023/6/22	+50bp
豪州	キャッシュ・レート	4.10	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/6/6	+25bp	2023/7/4	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2023/7/12	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.55	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/6/20	-10bp	2023/7/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/6/8	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/7/24	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/7/13	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2023/7/6	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/3/23	+25bp	2023/6/22	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/6/15	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.00	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/5/31	+25bp	2023/5/31	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行